主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2015 35
graph magazine vol.

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol 35 定価100円（税込み）

Unser HERR lebt

主は生きておられる

メッセージ

4 神の大きなみわざ　ゴットホルド・ベック

9人の証し

18 主イエス様、感謝します！　松田由紀子

26 暗闇から光の中に移されて　狩俣幸男

34 イエスさま、空をみあげてお待ちしています　狩俣望

43 放蕩息子という名のパリサイ人　木内一郎

51 主のあわれみと恵み　藤田匡

60 この方にいのちがあった　藤田信子

69 主は私にただ正直になることを要求なさいます　池田光夫

77 悲しみを喜びに変えてくださるイエス様　佐藤啓子

85 主を見上げて　牧野正士

神の大きなみわざ

ゴットホルド・ベック

五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。（使徒　2・1～4）

ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレテ人とアラビヤ人なのに、あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは。（使徒　2・11）

イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと、不思議なわざと、あかしの奇蹟を行なわれました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身がご承知のことです。あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。（使徒　2・22～24）

神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。（使徒　2・32～33）

「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」と言った。そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」（使徒　2・36～38）

新約聖書の中には、永遠の事実として神の大いなる七つのみわざが記されています。それは、クリスマス、受難節、復活祭、昇天記念日、五旬節、そして主イエス様の再臨と「小羊の婚姻のとき」です。ここではこれらについて簡単に述べたいと思いますが、私たちにとって最も大切だと思われる五旬節については詳しくみることにします。

1　クリスマス

まず第一はクリスマスです。改めて言うまでもなく、主イエス・キリストのご降誕をお祝いするものです。

しかし人間の誕生とは違って、ご降誕は主イエス様の始まりなのではなく、主イエス様がこの世に姿を現わしになったということです。主イエス様は永遠から永遠まで生きておられ、この方によって万物が造られたのです。

2　受難節

第二は受難節です。主イエス様が十字架上で死なれたことを記念するものです。主イエス様のこの世での生涯は三十三年でしたが、三十歳までは大工として働き、残る三年間は福音を宣べ伝え、病人を癒し、死人を生き返らせました。祭司長やパリサイ人たちの妬みによって、死刑の宣告を受け、裸にされ、十字架に釘づけられました。

主イエス様は、ご自分が神の子であり、約束され、預言された救い主であることを証しされました。また、ご自分がこの世に来られたのは、死ぬためであることをはっきりとお示しになりました。というのは、人類は神から離れたために死の罰を受け、永遠の滅びに行かなければならなくなったからです。しかし、主なる神は人類を愛しておられたので、人間に救いにあずかる機会を与えるため、この世にイエス様を遣わされました。わたしは全人類の身代わりとして死ぬ、と主イエス様はおっしゃったのです。

3　復活祭

第三は「復活祭」、主イエス様の復活を記念するお祝いです。主イエス様は死の状態に長くとどまることをなさらず、三日目に甦られました。主イエス様の復活は、主イエス様が本当に神の子である、という事実をもっともよく証明するものです。主イエス様こそまことの神の御子であり、約束された救い主です。主イエス様の復活は、全人類のための十字架の死による贖いが実際に有効なものとなり、力をもつことの証明でもありました。

4　昇天記念日

第四は「昇天記念日」、主イエス様が昇天されたことを記念するお祝いです。この昇天記念日は、復活祭のあと四十日目に行われます。主イエス様は復活されてから四十日間弟子たちにご自身を現わされ、交わりを持ち、食事をし、五～六百人もの人々に目撃されたあと、弟子たちの見ている前で天に挙げられたのです。

こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

（使徒　1・9～11）

5　五旬節

第五は「五旬節」で、復活のあと五十日目に行われます。これは、聖霊がただ一度だけ地上に注がれたときを記念するものです。主イエス様は弟子たちに「わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」（ルカ　24・49）と約束されました。「使徒の働き」1

神の大きなみわざ

章にも次のように記されています。

彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

（使徒　1・4～5）

しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。

（使徒　1・8）

「使徒の働き」2章には、五旬節の日に注がれた聖霊の四つの特徴が記されています。第一は、激しい風が吹いてくるような響きが家全体を満たしたことです。これは聖霊のご臨在を証明するものでした。

第二は、炎のような分かれた舌がひとりひとりの上にとどまり、みなが聖霊を受けたことです。

第三は、みなが聖霊を受けただけではなく、聖霊に満たされ、聖霊が彼らを支配するようになったことです。第四は、彼らが聖霊の賜物を受け、彼らが聞いたことも習ったこともないようなことばで話したことです。

五旬節はただ一回限りのことでした。聖霊は五旬節以来この地上に住まわれ、まことの信仰者のうちに宿っておられます。主イエス様はすべての人のために、完全に救いを成就してくださいました。重要なのはこの救いが、私たちひとりひとりの体験にならなければならないということです。このことはただ聖霊によってのみ実現されます。

ですから、私たちが聖霊に対してどのような態度をとるか、ということは知識の問題ではなく、それよりもはるかに大切なことがあるのに注意しなければなりません。私たちの人生が永遠の滅びに終わるか、それとも永遠のいのちに至るかということこそが非常に大切な問題なのです。

例えばフランスの哲学者サルトルは自伝の中で、「わたしの人生はもうどうすることもできないものになった」とまことに震撼すべき告白をしています。彼は望みも喜びもない人間になったのです。どうしてこんなことになってしまったのでしょうか。彼自身が言っています。「わたしは地下室で聖霊をつかまえ、それを追い出しました」。この結果が、目的のない人生となったのです。サルトルは福音を聞いて、聖霊の働きを感じたにもかかわらず、それを無視して意識的に心を頑なにしたのです。それによって彼はもっとも憐れむべき人間になり果ててしまったのです。それは彼が「わたしの人生は、もうだめになってしまった」と言ったそのことばから明らかです。

また多くの作品を残したアメリカの作家ヘミングウェイは、かつて次のように言いました。「わたしの人生は暗黒の道だ。そして、この道はいったいどこに続いて行くのかまったく分からない。わたしのたどる道は終わりのない暗黒の道であり、どこにも行き着くところがない」。彼の人生の最後は自殺でした。

私たちの人生が目的のない、暗黒の道になってしまわないように、聖霊が遣わされました。聖霊とは、単に神の影響力、力、感情ではなく、人格そのものです。聖霊は、創造主である神ならびにイエス様と同じように、主である神そのものです。

聖霊は、聖書の中でいろいろな名で呼ばれています。「真理の御霊」、「恵みの御霊」、「いのちの御霊」、「約束の御霊」、「力の御霊」、「愛の御霊」、「節制の御霊」、「潔めの御霊」、「知恵の御霊」、「啓示の御霊」、「栄光の御霊」、「信仰の御霊」、「主の霊」などです。

神の大きなみわざ

聖霊の未信者に対する働きかけ

聖霊は未信者に対してどのような働きかけをされるのでしょうか。みことばは次のように言っています。

その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。
（ヨハネ　16・8）

まず、「罪について世にその誤りを認めさせる」という意味を、みことばから考えてみましょう。人間は誰でも罪人です。主である神の判断は「義人はいない。ひとりもいない。・・・すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。」（ローマ　3・10、12）というものです。しかし、人間の判断はそうではありません。人間が自分の本当の姿、罪にまみれた姿を認めるには聖霊の働きによる以外にないのです。聖霊の働きによって目が開かれなければ決して救いはありません。聖霊によって、自分が何の望みも救いも持たない、本当に逃れ道のない者であることを知った人だけが、救いを与えるお方を呼び求めることができるのです。

第二に「義」について目を開かせるのも聖霊です。義とは、主イエス様によって救いが提供されており、この方を信じる以外に人間に義はないという事実に他なりません。主イエス様を信じる信仰によってのみ、私たちは義と認められるのです。

キリストは、私たちにとって、・・・義と聖めと、贖いとになられました。
（1コリント　1・30）

キリストを信頼し受けいれる人は誰でも「義」とされます。聖なる主の前に義とされるのは、人間の行いや努力によるのではなく、ただ、主イエス様を信じることによるのです。

第三に、人が「裁き」について目が開かれるのも、聖霊の働きによります。主イエス・キリストを個人的に、また意識的に受け入れない人はみな裁きを受け、愛の泉、いのちの泉であられる主なる神から永遠に離れた状態にとどまらざるをえません。人間はみな、罪人であり、罪人として永遠の死に服さなければなりません。けれども、主イエス様が身代わりになって死んでくださり、聖である神の罰を受けてくださいましたから、主イエス様に信頼を置くなら誰でも恵みによって義とされるのです。しかし、この素晴らしい贈り物を拒み、自分勝手な道を行く人は救いに入れられず「裁き」に遭うのです。

この真理を明らかにするために、聖霊は働いておられます。この真理を素直に肯定する人には本当の悔い改めと罪の認識があります。罪を告白し、罪から離れる人は主イエス様を信じるようになるのです。聖書を見ると、悔い改めて主イエス様を受け入れた人は賜物として聖霊を受けることが分かります。聖霊を受けることは新しい生まれ変わりを意味しています。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」・・・「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。」
（ヨハネ　3・3、5）

神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。
（テトス　3・5）

神の大きなみわざ

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

（2コリント　5・17）

聖霊が働かれるところには新しい創造があります。聖霊がなければ望みもなく本当の救いもありません。

もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。（ローマ　8・9）

これまで述べてきたことを一つの実例によってまとめたいと思います。ヒトラーの時代にドイツで大きなリバイバルを起こしたボンヘッファーという伝道者がいました。彼が「主なる神の恵み」、「人間の罪にまみれた状態」、そして「回心の必要性」などについて語ったとき、聴衆はそういう話よりも「盗んではならない」、「殺してはならない」というようなこと、つまり道徳について話してほしいと頼んだそうです。これに対してボンヘッファーは、庭にある梨の木を例にひいて分かりやすく答えたのです。「良い梨を作ろうと思う人が、毎日梨の木に向かって『いい梨を作れ』と繰り返し命令しても何もならない。しかしその木を切って、良い梨をもたらす木を接げば良い梨を収穫することができる。これと同じように、私たち人間も聖霊の働きなしには、新しく生まれ変わることも、良い実を結ぶこともできないのです」と。

聖霊の信じる者に対する働きかけ

言うまでもなく、聖霊は信仰者に対しても働きかけられます。信仰者にとっては御霊の賜物が問題なのでなく、御霊の満たしこそが大切です。

五旬節に聖霊を受けた人々はみな聖霊に満たされました。しかし聖霊の満たしは過ぎ行くものであり、その後も彼らは何回も聖霊に満たされたのです。御霊の賜物は一回限りのもので決して失われないものですが、御霊の満たしは失われるものなので、何回も満たされる必要があります。エペソの教会の聖徒たちは聖霊の賜物をもっていましたが、それにもかかわらず「御霊に満たされなさい」（エペソ　5・18）という警告を受けました。

では、「御霊の賜物」と「御霊の満たし」の違いは何でしょうか。簡単に見てみることにしましょう。

第一に、御霊の賜物と新しい生まれ変わりは一回限りのもので、いつまでも続きますが、御霊の満たしは全き献身の結果与えられるものなので、失われる性質をもっています。

第二に、御霊の賜物によって人は新しく生まれ、新たに造られた者となりますが、御霊の満たしは、古い人が死に渡されることによってなされるのです。

第三に、御霊の賜物によって真の信仰者が生まれ、御霊の満たしによって信仰者は主イエス様に似た者とされます。

第四に、御霊の賜物によって神に対する闘いが終わり、御霊の満たしによって悪魔に対する闘いが始まります。

第五に、御霊の賜物によって「神との平和」が与えられ、御霊の満たしによって主である「神ご自身の平和」が与えられます。

第六に、御霊の賜物は罪に対する罰を無いものにし、御霊の満たしは罪を犯すことから守ってく

れます。

第七に、私たちが罪にまみれた生活を主イエス様に明け渡すことによって御霊の賜物を受け、全き献身によって御霊の満たしを受けます。

このように、御霊の賜物と御霊の満たしには違いがあります。

主イエス様を信じることによって御霊の賜物を受ける人は大勢いますが、御霊の満たしを受ける人は少ないのです。御霊に満たされるとは主に支配されることです。主イエス様を受け入れる人は大勢いますが、主イエス様とともに歩む人は実に少ないのです。みことばは言っています。

あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。

（コロサイ　2・6）

光に来ることだけが大切なのではなく、光のうちを歩むことこそ信じる者にとって大切です。「神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら」（1ヨハネ　1・7）、主イエス様の御許に来るだけでなく、主にとどまり、主イエス・キリストにあって歩むことが大切です。「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません」（1ヨハネ　2・6）。新しいいのちを持つだけではなく、いのちにあって新しい歩みをすることが必要です。信仰をもって主イエス様に近づくだけでなく、毎日の信仰生活において「見るところによって」ではなく「信仰によって」歩むことが大切です。つまり、御霊の賜物を持つだけでなく、御霊に満たされ御霊によって歩むことが大切なのです。

御霊によって歩みなさい。（ガラテヤ　5・16）

召しを受けることだけでなく、召しにふさわしく歩むことが必要です。主イエス様の愛を体験的に知るだけでなく、愛のうちに歩むことが大切です。

私たちは御霊によって動かされているのでしょうか。御霊は私たちの考えや行いに臨んで働いておられるでしょうか。それとも聖霊よりも人間の方が私たちに影響を及ぼしているのでしょうか。主イエス様の愛こそ私たちにとって第一のものとなっているのでしょうか。

また一例を挙げてみましょう。ここに一本の銅の針金があるとします。それを見てある人はふつうの針金だと言い、詳しいことを知っている人は高圧電流の針金だと言います。ふつうの針金と高圧電流の針金とはずいぶん違います。それと同じように、私たち信仰者もふつうの針金にすぎないか、それとも大きな力を運ぶ者かのいずれかでしょう。

また、ここに一枚の紙があるとします。ある人はふつうの紙だと言いますが、銀行員は何千万円もの価値をもった小切手だと言います。私たちもこれと同じように、御霊が私たちを自由に用いることができるか否かによって、ふつうの紙きれであったり、莫大な価値をもつ小切手であったりするのです。

神の大きなみわざ

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

（1コリント　6・19～20）

以上のことから、私たちが聖霊に対してどのような態度をとるかが非常に大切だということがお分かりになられたと思います。

最後に、残りの二つのお祝いについて短く述べてみましょう。この二つはまだ実現されていませんが、これまでに述べてきた五つの出来事がすでに与えられたのと同じように、これから先、私たち人類の歴史に起こるはずのことです。

6　主イエス・キリストの来臨

第六は、主イエス様の再臨、主イエス様が再びこの地上に来られることです。これによって生じることは、これまでどの政治家が努力しても実現できなかったこと、この地上に「義」と「平和」がもたらされることです。このとき、主イエス様の真の姿を見ることができるのですから、信じる人々にとって本当に心からお祝いすべきことです。主イエス様を見ることは最高の栄光です。聖書は私たちが主イエス様に似た者になると言っています。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。
（2コリント　3・18）

毎日私たちはこのお祝いのときを待ち望むべきです。これこそ、私たちの生ける望みです。

7　小羊の婚姻のとき

第七のお祝いは、最も偉大なできごと、「小羊の婚姻」です。黙示録に「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ」（黙示録　19・9）と記されています。「小羊の婚姻」とは私たち信じる者が主イエス様と完全に、永遠に一つとなることです。これこそ想像を超える素晴らしい出来事です。

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。
（1コリント　2・9）

今まで述べてきた神の七つの大きなみわざすべてが、私たち人類に対する神様の愛のみわざです。なんという恵みでしょうか。

私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。
（黙示録　19・7）

主イエス様、感謝します！

松田　由紀子



夫の博さんと

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

（エペソ　2・1～3）

私は、このみことばの通りの者でした。もっと清い、公平な、皆が幸せになれる世界があるのではないか、と憧れていたように思います。イエス様は、こういうみじめな私を憐れんでくださいました。職場の同僚だったある姉妹から、私が切に望んでいた平安と静けさ、主ご自身の清さが流れ出ているのを見せていただいたのです。「私もこの方が持っているものが欲しいです。

もしあなたが本物の神様なら、私に分かる形で、ご自身を現してください」と祈りました。主は応えてくださり、私を救いに導いてくださいました。同時に洗礼にも与かりました。その時、「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」（ヨハネ　15・16）のみことばをいただきました。イエス様が私を選んでくださったのだから大丈夫とうれしくなり、喜びがあふれてきて、思わず周りの方々にイエス様のことをお話ししていました。三十二歳の時でした。

その当時、世の中の人たちを見て、結婚はしょせん形だけの偽善だ、しないほうがましだと思っていました。それが、イエス様と出会って以来、祝福された兄弟姉妹のご家庭がとても麗しく、輝いて見えました。また、結婚は人間の幸せのために与えられているものであり、結婚の土台は人間の感情や思いではなくて、主ご自身であることを聖書から知りました。私は、目からうろこが落ちるような思いで、「主がくださる結婚がしたいです。みこころなら私にも与えてください」と素直に祈る者に変えられていました。

そして二年後に主人との結婚が与えられました。その時、主人は奥さんである明美姉妹を亡くし、六才の長男と二才の長女をかかえていました。早く助け手が与えられますように、と兄弟姉妹方と一緒に私も祈っていました。

その助け手は、思っても見なかった私自身でした。さまざまな困難の予想される結婚でしたが、イエス様が先頭に立って、力強く導いてくださり、祝福で覆ってくださっていました。私も、両親や周りの方々も皆整えられ、平安と喜びにあふれて結婚することができました。今考えても、私が迷うことなく結婚できたのは、背後に大勢の兄弟姉妹のお祈りがあったことを思い、心から感謝しています。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（1テサロニケ　5・16〜18）

結婚に当たってこのみことばをいただき、新しい地に喜んで踏み出しました。でも現実は、すべてが受け入れがたく理解できない状況でした。私の信仰は一体どこにあったのかと思うほどで、喜ぶことなど到底できませんでした。形だけはお祈りしていましたが、主に信頼してというものではありませんでした。イエス様はどこかに隠れてしまわれ、荒野に一人放り出されたような気がしていました。自分の状況を兄弟姉妹に話し、祈っていただくことなど考えもしませんでした。私ならこの結婚はやっていけるという、高ぶった思いを持って、また、兄弟姉妹に祝っていただき、期待されて結婚したこともあり、惨めなありさまを話すことなどとてもできないと思っていました。家庭でも集会でも孤独でした。

それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。

（マタイ　19・5）

主人は主が選んでくださった最良の夫のはずでしたが、なかなか一つになれませんでした。子どもをめぐって対立し、お互いに相手が理不尽だと思っていました。召された明美姉妹の存在がハードルとなり、素直になれず、表面では主人に従っていましたが心の中では抵抗していました。どうして私には初めからの結婚が与えられなかったのか、と主を恐れず、つぶやく者でした。また、結婚後二年で私の両親と同居することになり、基礎の固まっていない私たちの家庭はさらに複雑になり、互いに裁きあう、冷たい家となっていきました。主が与えてくださった夫、子どもたち、また両親でしたが、私は感謝できませんでした。

このようなありさまで三十二年が経った今、イエス様の前に実りなく空っぽの手を差し出さなければならないことを本当に申しわけなく思い、悔い改めの連続です。私は、主が土台であり中心であるべき家庭に自我を持ち込んでいました。主から目を離し、主のみこころを妨げてきました。長い時間、ある時は主を怒らせ、またある時は悲しませてきました。

見よ。わたしはあなたを練ったが、銀の場合とは違う。わたしは悩みの炉であなたを試みた。わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行なう。どうしてわたしの名が汚されてよかろうか。わたしはわたしの栄光を他の者には与えない。

（イザヤ　48・10〜11）

知恵のある女は自分の家を建て、愚かな女は自分の手でこれをこわす。

（箴言　14・1）

私はあなたの目の前から追われました。しかし、もう一度、私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです。

（ヨナ　2・4）

それでも主は、どうしようもない私をお見捨てにはならず、変わらないご愛と忍耐をもって、ずっと導き続けてくださいました。そして、私は本当はどういう者か、私の内には何があるのか、を教えてくださいました。イエス様が十字架につかれたのは、生まれつき持っていた私の底なしの罪を贖うためであり、流してくださった清い血潮は、私の罪を完全に赦し真っ白にしてくださるためだ、と知らせてくださいました。主に心から感謝します。

ヤコブよ。これらのことを覚えよ。イスラエルよ。あなたはわたしのしもべ。わたしが、あなたを造り上げた。あなたは、わたし自身のしもべだ。イスラエルよ。あなたはわたしに忘れられることがない。わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。

（イザヤ　44・21〜22）

私は、召された明美姉妹の存在を長い間、心の中で封印してきました。そうしないと自分を保てない者でした。でも何年か前から、「その戸をあけなさい」と言う声が聞こえる、と思うようになりました。そういう中で、思いもよらなかったことですが、二〇一三年二月に、明美姉妹のお骨が御代田の納骨室に移されました。そして六月には、二十数名の兄弟姉妹と合同の納骨・記念会が開かれました。明美姉妹のお兄さんの西口勝さんが芦屋から参加されましたが、主の祝福とご愛が豊かに注がれた納骨・記念会でした。お兄さんと私たち夫婦、長男・崇の四人での楽しい語らいのひと時も与えられ、主がくださった恵みに心より感謝いたしました。

納骨室には、私の両親も納めていただいていますが、父と母と、明美姉妹のお骨を前に、私は主との豊かな交わりの時をいただきました。

主が、子どもたちがまだ小さく母親を必要としている時に、何故か明美姉妹を召されたこと。そしてその後に、子育ての経験もなく、主人のこともまったく知らない私を送られたこと。理解できないこと、納得のいかないことだらけの結婚生活でしたが、すべて、イエス様がなさったことだと感謝して受け取ることができました。そして、その時初めて明美姉妹がイエス様にある姉妹であり、また、主にある私の家族であると思えました。明美姉妹も私もただイエス様の愛のうちにあって導かれ、測り知れない主のご計画の中に共に生かされているのだと思いました。前半を走った明美姉妹のバトンを私が受け取り、後半を今走っているのだと思えました。私は姉妹が主にある同志のように思えました。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」とある通り、イエス様が時を定めて最善をなされたのだ、と分からせてくださいました。主は、私にとって大きな重荷であったことを喜びへと変えてくださいました。今は、主人と夫婦としていただいたことを心から感謝しています。イエス様を心から誉め賛えます。

私たちの国籍は天にあります。（ピリピ　3・20）

私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は主を思い出しました。私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。

（ヨナ　2・7）

長女・めぐみは、二〇一三年十二月に結婚をさせていただきました。結婚の準備の途中では色々なことが起こされ、試されました。私自身はあくまでも見えるところで確実なものが欲しいという者であり、それをゴリ押しして周りにつまづきを与えることは以前と何も変わっていないことを知らせられました。また「形はどうでも良いよ」と言ってくださるベック兄のことばを通して、何が一番大切で、主が望んでおられることは何であるかを教えていただきました。

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。

（詩篇　32・8）

最後になりますが、私はこの証しをまとめている最中に肝炎を発症し、三週間入院しました。それまであまりに忙しく走り続けていた私を、主は憐れみによっ

て日常から切り離し、イエス様との静かな交わりに入れてくださいました。みことばや、メッセージ・証し、そして賛美のすべてが、慕わしい天のみ国へと、想いを運んでくださいました。穏やかで、まるで雲にでも乗せてもらっているかのような感謝な日々でした。

また短い間に、たくさんの方々との出会いをいただき、その中には兄弟姉妹がすでに祈られていた方々もあり、共に祈る恵みに私も加えていただきました。

退院の時には、大勢の兄弟姉妹たちの祈りの援軍をいただいて、まるで自動ドアが開くように、あれよあれよという間に、福音の本や冊子、みことばカードなどを、たくさんの方々にお渡しすることができ、生きて働かれる主の御業を目の当たりにさせていただきました。本当に感謝でした。蒔かれた種が実を結びますよう、お祈りしています。

治療の方はこれからも続き、今までのようにはいかない肉体の弱さを与えられましたが、「弱いままで、つ

いてきなさい」とおっしゃる主にすがりつつ、主の栄光を拝していきたい、と願っています。

私はどうしようもない者、主のご愛に値しない者ですのに、ここまで憐れんでくださり、またこれからも恵んでくださるというご真実な主に、心から感謝し御名を賛美いたします。

この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女はよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。（ルカ　7・47）

もう間もなく主イエス様が迎えに来てくださるこの今の時、このみことばのように多く赦された者として、よけい愛する者として主にお従いしていきたいと願っています。

私たち家族のために、長い間とりなしの祈りをしてくださっている兄弟姉妹のご愛に心から感謝します。

これからも、御国までよろしくお願いします。

イスラエル、あなたはあなたの神に会う備えをせよ。（アモス　4・12）

あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。（ダニエル　12・13）

あなたの目は、麗しい王を見、遠く広がった国を見る。私たちの祝祭の都、シオンを見よ。あなたの目は、安らかな住まい、取り払われることのない天幕、エルサレムを見る。（イザヤ　33・17、20）

松田由紀子（まつだ　ゆきこ）
一九四七年京都府福知山市に生まれる。
伊丹市立緑ヶ丘小、練馬区立石神井東中、都立大泉高校、東京造形大学卒業。
神奈川県立山北高校、柿生西高校勤務。
一九八二年に松田博（ひろし）と結婚、現在に至る。
夫・博（ひろし）、長男・崇（たかし）、長女・大山めぐみ、長女の夫・大山活寿（かつひさ）、次女・初穂（はつほ）、次男・賛（あきら）

暗闇から光の中に移されて

狩俣　幸男



左から森島左武郎さん・久仁子さん、優太さん、こみちさん、潤太さん、虹太さん
後列が幸男さん、妻の望さん

私は一九六三年に沖縄県浦添市で父昌傳（しょうでん）・母充子（みつこ）の長男として生まれました。弟三人、妹一人の七人家族でした。

父は大工で、建設会社を営んでいましたが、数人の職人さんといっしょに仕事を請け負う小規模の会社でした。当時は深刻な不況のため経営は大変で、親族から借金をしてつなぐことも度々だったようです。小学校の高学年の頃はよく現場に連れていかれ、父の手伝いをさせられました。

母は静かでおとなしい人で、イエス様を信じていました。幼い頃は九州で育ち、戦争で祖父母の出身地であった沖縄県の宮古島に疎開したそうです。そこで中学生の頃に対人恐怖症になり、それから逃れるためにいろいろな宗教や精神鍛錬のようなところに行きましたが、対人恐怖症が良くなることはなかったそうです。ある時に教会の福音伝道集会のチラシを見かけ、その集会に集って救われ、対人恐怖症からも解放されたそうです。

私の家は、母方の祖父母と長兄の家族が住む家の隣でした。祖父は戦後、出家して自宅で小さなお寺を開き、近所の方々の法事を行っていましたので、お経を読む声が毎朝聞こえてきました。沖縄は先祖崇拝の強い土地で、いろいろな行事の度に親族が祖父の家に集まりました。母は、そういう行事は偶像崇拝だと言って参加しませんでしたが、そうした行事が近づくと体調がひどく悪くなり、寝込んでしまうような状態でした。父は、いつもひとりでそれらの行事に参加していました。母が行かないことで肩身の狭い思いをしたのだと思いますが、帰ってくるとお酒が入っていることもあり、家の中で怒鳴り散らし、母に対して罵声を浴びせるといったことが度々でした。私はそれが本当に嫌で、行事がある度に嫌な気持ちと不安を抱えていました。母は、父から結婚を申し込まれた時にクリスチャンであることを話し、父はそれでもいいと受け入れて結婚したそうです。なぜ今になって父はそういうことをするのか、どうしてもっと家族を守ることができないのかと思い、反発するようになっていきました。また母に対しても、どうして、もう少し妥協して親族とうまくやっていくことができないのか、と思っていました。

私自身は表面的にはおとなしい子どもでしたが、心の中はゆがんでいて、段々と誰にも心を開かないようになっていきました。他人とは、表面的に合わせることはあっても、心を許すことがありませんでした。本当に孤独な闇の中でした。また、自分で自分を赦すこともできませんでした。ただ、自分の好きなことに没頭している間だけ孤独を忘れることができ、夜になり床につくと良心の呵責に苛まれるといった状態でした。でも自分ではどうすることもできませんでした。家族はバラバラで家の中はとても荒れていました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

しかし、イエス様はそんな私を救いへと導いてくださいました。

私は、二十七歳の時に重い糖尿病を発症して入院しました。約一か月の入院生活を終えて退院してきた頃から母の体調が悪くなっていきました。最初は手にリウマチのような症状が出始め、指が痛くて動かすことができなくなり、病院で診てもらいましたが原因がわかりませんでした。そのうちにまったく動かすことができなくなりました。母は、このままでは家族に負担をかけてしまうと言って、そのことを苦にして思い悩むようになり、うつ病になってしまいました。目が離せないので、私たち兄弟は昼も夜も交代で母の看病をしました。

父は当時、実家の修繕のため宮古島の長兄の家に行っており、三～四か月ほどして帰ってきました。父は胃が痛いと言っていましたが、すぐには病院に行かず、年が明けてから病院へ行きました。その日、職場に電話がかかってきて、父が末期癌で余命三か月であることと末の弟がバイクで自損事故を起こして入院したことを告げられました。私は何が起きたのか理解できず、少しの間、茫然としていました。とにかく職場の上司に話しをして一か月休職させてもらいました。その日から父の病院と弟の病院へのお見舞い、それに自宅での母の看護、と三か所を行き来する生活が始まりました。

父は手術をしましたが、状態はどんどん悪化していきました。その頃、沖縄キリスト集会に導かれていた母の一番下の妹にあたる叔母が「光よあれ」を数冊持ってきてくれました。その中の第4集を読んだ時、末期癌の方が生き生きとした希望を持っている姿がとても印象に残りました。父にもせめてこのような希望を

持って最期を迎えてもらいたいと思いましたが、この時は自分のこととして受け止めてはいませんでした。しばらくして父は亡くなりました。

父が亡くなってから、母のうつはますますひどくなりました。私たちも交代で起きて横についているという生活が続き、疲れ切っていました。ある時、いつもと同じように母が夜中に起きてきたのですが、私は疲れ切っていて起き上ることができず、そのままた眠ってしまいました。弟たちの騒がしい声で目が覚めると、母が劇薬の洗剤を飲んで自殺を図り、苦しんでいました。すぐに救急車を呼んで病院に行きましたが、劇薬が頭までまわっていて、意識もなくなり話すこともできなくなっていました。母は段々と弱っていき、もう時間の問題でした。血圧が下がり心拍も弱くなっていく母を横で見ながら、自分の愚かさを思いました。沖縄キリスト集会の方々が来てくださって、母が好きだった讃美歌399番をベッドの横でいっしょに賛美しました。その時、集会の兄弟方との交わりで、私は「もし、真理があるとしたら、聖書にあると思う」と話していました。本当にそう思いました。ベックさんたちの言っていることは本当だと思いました。私が母の耳元で「本当に自分は馬鹿だった」と言うと、意識がないはずの母の目から涙がこぼれました。三日後に母は息を引き取りました。

母が亡くなってから私たち兄弟は、沖縄キリスト集会に集うようになりました。すでに結婚してアメリカに移住していた妹も、ビザの関係ですぐに帰ってくることができなかったのですが、二か月程後に帰ってくることができて救われ、その年の沖縄キャンプの時に兄弟全員で洗礼を受けることができました。

集い始めてしばらく経った頃、ベック兄に交わっていただき、それまで心にかかっていた自分の罪を話すことができました。ベック兄は「人間はみんなひどい者だよ。後はイエス様にまかせましょう」と言ってくださ

ました。その時、長年心の中にあった暗闇が消えてなくなり、本当に心が晴れ、喜びがあふれてきました。これまで一度も味わったことのない喜びでした。それからは、みことばが本当に嬉しくて、みことばを読むと涙があふれるようになりました。

わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。（ヨハネ　7・38）

主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。（2コリント　3・17）

ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。（ヨハネ　8・36）

イエス様は、このみことばのとおり、罪によってがんじがらめになっていた私の心を解放して本当の意味で自由にしてくださり、心の中に喜びがあふれるようにしてくださいました。

結婚のことについても少し証しさせていただきたいと思います。誰にも心を開くことができなかった私は、女性と個人的にお付き合いしたこともありませんでした。ですから、もう結婚することもないと思っていました。しかし、イエス様は、そんな私にも恵みを与えてくださいました。三十五歳の時、私は集会の兄弟の会社へと導かれ、沖縄から東京に出てきました。そこの同じ部門で望姉妹が働いていました。同じ顧客を担当し、いっしょに仕事をしているうちに彼女の信仰的な態度に惹かれるようになっていきました。最初はわからなかったのですが、彼女も大変な試練の中を通ってきていて、イエス様しかないというところに導かれていました。彼女とならイエス様を見上げていっしょに歩んでいけるような気がして、結婚のことを祈るようになりました。

数か月経ったある時、祈った後で聖書を開くと「結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。」（ヘブル13・4）というみことばが目に止まりました。その時、みこころかどうか、わからないけれども、結果はイエス様に委ねて、とにかく話をしてみようと思いました。数日後、彼女に結婚したいと思っていることを話しました。彼女はとても驚きましたが、「祈ります」と言ってくれ、そして一か月後に返事をくれることになりました。返事を待っている間にも何度か話し合う機会が与えられ、その中で自分の罪のことを彼女にすべてを話しました。彼女は「明らかにされたことはすべて光ですから」と受け取ってくれました。一か月後、結婚を承諾する返事をもらいました。後で聞いたことですが、私が申し込む前に私の糖尿病の状態を横で見ていて、狩俣さんには助け手が必要だということで、「誰かふさわしい助け手を与えてください」と祈ってくれていたそうです。「それが、まさか自分だったとは」と笑って言ってくれました。

良い妻を見つける者はしあわせを見つけ、主からの恵みをいただく。（箴言　18・22）

一九九九年の十二月に御代田で結婚式を挙げさせていただきました。

私は重い糖尿病で、家内も十代の頃に脊椎をつなぐ大きな手術を受け「出産は無理です」と言われていたそうなので、私たちは夫婦二人で過ごしていくのだろうと思っていました。しかし、イエス様は私たち夫婦に四人もの子どもたちを与えてくださり、今は六人家族になりました。結婚してからもいつもいいことばかりではなく、もちろん、試練やつらいこともたくさんあります。しかし、それだからこそ、いつも自分たちはダ

すべてのことから守ってくださり、母子ともに無事で産まれました。子どもたちにも、それぞれに与えられている問題や試練があります。いろいろなことが起こされますが、イエス様が背負ってくださって、一人ひとりにとって最善のご計画を成してくださっていることを経験的に知らせていただいています。

救われてから二十年余りになりました。私自身の肉の性質は救われる前とまったく変わっていません。何かある度にそのことを思い知らされます。相変わらず高慢で自己中心な者であり、気が付くとイエス様を悲しませるようなことしかできない本当にみじめな者です。しかし、こんな者でもイエス様は絶対に見捨てないと約束してくださっています。

主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」

（ヘブル　13・5）

メな者だというところに共に立ち帰ることができ、共に祈れることを感謝しています。

わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。

あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

（イザヤ　46・3〜4）

昨年、二〇一三年の五月に三番目の子から八年空いて四人目の潤太が与えられました。上の子は全員、帝王切開での出産でしたので四回目の帝王切開となること、高齢出産であること、妊娠中に私が緊急入院する、といったいろいろなことがありましたが、イエス様がイエス様ご自身が背負ってくださり、運んでくださり、救い出してくださいますから、今は安心してイエス様におまかせすることができます。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

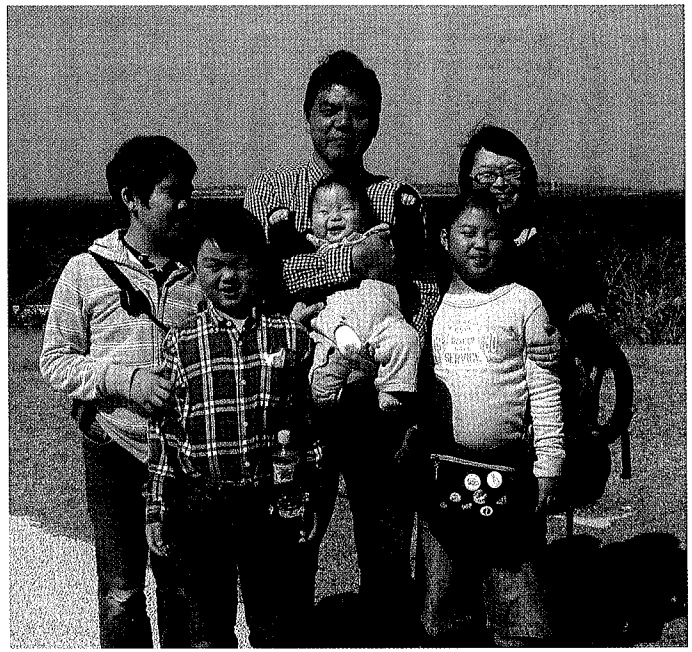
主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。（詩篇　23・1〜6）

狩俣幸男
沖縄県浦添市出身、浦添市立仲西小学校、浦添市立仲西中学校、沖縄県立沖縄工業高等学校、
現在は、サーヴァンツインターナショナル株式会社勤務

イエスさま、空をみあげてお待ちしています

狩俣 望



右後が望さん、ご家族と一緒に

●主人の入院と主人の妹との交わり

二〇一四年二月、私の義弟佐藤精兄弟の初めての記念会が召天三年で持たれました。しかし、その週の初めから主人は体調が悪く、足の痛みを訴えておりました。日に日に痛みが強くなり、びっこを引きながら通勤していました。記念会での司会が予定されていた主人は、「きっと祝福がすごいから、行けないようにサタンが妨げているのだね、でも主は勝利される」と申しておりました。思っていた通りに、前日には痛みはうそのように引いたのです。感謝しながらの参加となりました。翌日曜日、妹がベック兄に「ベックさん、再臨はいつですか?」と聞きました。ベック兄は微笑んで、「今夜だよ」とおっしゃいました。今夜主がいらっしゃると思うと本当にうれしく、待ち遠しく思いつつ帰路につきました。

帰宅した日の夜中、主人のうめき声で目が覚めました。主人の右足は長靴を履(は)いているようにてかてかと腫れ、高熱をだしていました。救急車で運ばれて、対応してくださった当直の医師から、「菌によっては抗生剤がきかないかもしれない。そうなると足の切断か、最悪の場合には生命の保証はできません」と言われ、そのまま入院となりました。ベッドで主人と一緒に祈り、帰路に着いた時には空は少し赤味をおび、夜が明けはじめていました。歩きながら、ベックさんが「再臨は今夜だよ」とおっしゃったのを思い出し、「イエス様、今夜いらっしゃるんじゃなかったんですか?もう今夜が終わってしまいます。イエス様、主人と一緒にあなたにお会いしたいです」、と声に出して叫びました。そして上を見ると頭の真上はまだ暗く、星が光っていました。大声で泣きながら、イエス様に文句を言いながら、一人でとぼとぼと歩いて家まで帰りました。

八年前のちょうどこのころ、長女の"こみち"が急に呼吸をしなくなり、救急車で病院に運ばれたことがありました。その時、私は妊娠七か月でした。「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」(ヨブ1・21)のみことばが頭をぐるぐる回りました。お腹のあかちゃんを与えられた主は、こみちを取られるのだと思いました。「取り上げないでください、イエス様」と叫びました。数分でこみちは息を吹き返しました。今回も八年前と同じように身重の状態で主人と救急車に乗りました。夜中でしたが、わが家の一階下に住んでおられる加藤和彦兄がすぐ来てくださり、救急隊の方と一緒に主人を運んでくださいました。私は、救急車の中でも、お腹は張らず、痛みもありませんでした。主が、お腹の赤ちゃんをお取扱いくださっているのがよく分かりました。赤ちゃんを愛してくださっている主ご自身が、柔らかいお腹の中で大切に大切に守ってくださっていました。感謝でした。主人は、入院を通してたくさんの悔い改めが与えられたそうです。私も悔い改めをいただき、夫婦共に悔

い改めに導かれたことは本当に感謝でした。入院中の主人はすっきりして嬉しそうで、壁に貼られたみことばを読んでいるか、泣いているか、眠っているかのどれかでした。とにかくずっと主とお交わりをいただいているようでした。主人の顔はつやつやでした。たくさんの兄弟姉妹に祈っていただき、お見舞いいただき、私たち家族はぷかぷかと浮いているような平安そのものでした。まったく知らない兄弟姉妹からの祈りとみことばのメール、特に「兄弟の病気を通して、兄弟姉妹と心あわせて祈ることができたことがうれしかったです」というメールからは、主にある家族が心一つにして祈ることを主が喜んでくださり祝福してくださる、と分からせてくださいました。改めて兄弟姉妹との交わりの中にいることを感謝しました。

彼らは主のみわざを見、深い海でその奇しいわざを見た。（詩篇 107・24）

退院後のことですが、それまでずっと悩みの中にいた主人の妹が不思議な方法でバンクーバーのキャンプに導かれました。義弟の記念会から、主人の入院、退院、バンクーバーキャンプと流れていく中で、主は奇しいわざを次々と見せてくださいました。記念会の前日に主人の痛みが消えたこと、加藤和彦兄のお仕事がお休みで助けていただけたこと、心配症の長男が私たち夫婦の留守中も眠っていたこと、緊張するとお腹が張って動けなかった私のお腹が張らなかったこと、お交わりが苦手だと言っていた主人がお見舞いのお交わりに満たされて喜びの中に置かれていたこと、入院費を払う日にお金の必要が満たされたこと、退院した日に主人の妹から電話があって夫婦でのバンクーバー参加が決まったこと、主人自身もキャンプに参加できたこと、などなど、主がパズルのようにすべてを整えてくださったとしかいいようがありません。主人の妹は、今もワシントンでの主のお交わりの中に置かれています。まるで清らかな水の流れによって自我が一気に取り払われ、主のご愛と恵みが四方八方へと流れていくようでした。

●四人目の出産

前後しますが、長男、長女、次男は三人共、帝王切開での出産でした。結婚前に大きな手術をしていましたので、出産は無理とお医者様には言われていたのですが、主は与えてくださいました。

私は昨年夏頃から体調を崩し、首を動かすことができなくなりました。いったん横になると身動きがとれなくなるため、夏休みの間、ほとんどの家事は、家族にしてもらうしかありませんでした。結婚してから二～三年ごとに秋口になると腰が立たなくなり、約一月寝たきりになりますが、頸椎は初めてでした。体の自由が徐々に利かなくなっているようで、「イエス様、さすがにつらいです」と漏らしましたが、祈り会の姉妹に、「のんちゃんは、にこにこして『ありがとう』と言って、家族のことを祈っていればいいんだよ」と言われ、涙があふれました。

二～三か月経って日常生活が送れるようになりましたが、頸椎とは違う具合の悪さがあり、妊娠していることが分かりました。「イエス様、年齢も経済も健康面も、しかも四回目の帝王切開も、さすがに無理です」と主に申し上げました。口に出してこのように言ってから、「わたしがします」という声がストンと降ってきました。気が付くと私は、「無理です」と言ったその口で、「私には絶対無理だからこそ、主がされることがはっきり分かる。いのちは主のものだもんね」と言っていました。主が与えてくださった思いでした。主が目的をもって臨んでくださっていると思わざるをえませんでした。

私たちとしては、どうすればよいかわかりません。

ただ、あなたに私たちの目を注ぐのみです。
（2歴代誌　20・12）

神である主は、私にこのように示された。見よ。王が刈り取ったあとの二番草が生え始めたころ、主はいなごを造っておられた。
（アモス　7・1）

私の体調が落ち着いた頃に主人の入院がありました。アモス書にあるいなごはサタンが送りこんだものではありません。主がせっせと造っていらっしゃったのです。それが必要だったからです。年齢も、経済状態も、体の状態も、帝王切開の回数も、私にとってはいなごの襲来そのものでした。でも主は計画通りになさるのです。私にできることは、すべての面でお頼りすることしかありません。そう思って手放した途端、どっと喜びがやってきました。家族と一緒にお腹の赤ちゃんをいとおしんでその日を待ちました。ゆったりと心待ちにして過ごせたのは、出産四回目にして初めてかもしれません。

今回の出産に関してもたくさんの兄弟姉妹に祈っていただきました。当日は、まったく緊張せず、本当にリラックスして出産に臨むことができました。

イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「わたしが彼らの捕われ人を帰らせるとき、彼らは再び次のことばを、ユダの国とその町々で語ろう。『義の住みか、聖なる山よ。主があなたを祝福されるように。』

ユダと、そのすべての町の者は、そこに住み、農夫も、群れを連れて旅する者も、そこに住む。わたしが疲れたたましいを潤し、すべてのしぼんだたましいを満たすからだ。」
（エレミヤ　31・23～25）

この箇所から、主に潤された人生を送ってもらいたい、潤してくださるのは主だけという思いが与えられ、生まれてきた子を潤太と名付けました。生まれる前は、このままこの子と一緒に携挙に導かれるなら幸せだろう、と思っていました。しかし今は、生まれさせてくださってありがとう、という思いです。上の子どもたちも学校生活でいろんなことがありますが、潤太の存在になぐさめや喜び、恵みをいただいています。

●次男を通していただいていること

一年生になってしばらくして学校に呼ばれ、次男の発達のことを言われました。それは幼いころから少し思い当たる部分でもありました。学校生活を送るのにどうしたらよいのか、まずそのことに思いが行きました。学校では様子を見ていきましょう、家庭で何か気が付くことがあれば先生に報告します、ということに至りました。

次男は体にマーカーで書かれたり、物がなくなったり、壊されたり、いたずら書きされることがありました。私は彼の心のいたみや悲しみに寄り添うのではなく、誰にされたの、どうしてされたの、と気づかないうちに彼の痛みを増し加えるような態度をとっていました。主人はただ膝に抱いて、痛かったね、つらかったね、泣いたらいいよ、一緒に祈ろうね、とただじっと抱いていました。じっと抱かれていると次男は心が柔らかくなり、安心し、涙があふれ、すっきりと元気になるようでした。

サタンは私の痛いところを突いて、「子どもたちはお父さんと一緒の時に安心するね」、「あなたには愛がない」、と語りかけます。そんな時は、「ごめんなさい、そうです、私には愛はありません。ただ主ご自身が愛そのものです」と、イエス様を見上げています。

もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キ

リスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。（ローマ　8・11）

その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。（ヨハネ　14・17）

この世は、そのままでいいよ、と丸ごと受け止めてくれるところではありません。そのままでいいよ、と言ってくれる方はイエス様おひとりです。そのままでいい、と主に言っていただいて私もこんなにうれしいのだから、子どもたちはどんなにうれしいだろう。ただ受け止めて抱かれると私でさえほっと安心するのだから、子どもたちは一体どれだけ安心するだろう。「イエス様はあなたをそのまま抱いていてくださる。不安なあなたを大丈夫だよと包んでくださる」と子どもたちに伝えることが主がくださった仕事だと思いました。かつて私もみことばからそのことを知らされて安心して涙したように、子どもたちにも知ってもらいたいと強く思いました。

ジョン・バニヤンの天路歴程の、主人公の奥さんクリスチアーナがまもなく天国に行くという時、子どもたちに言ったことばを抜粋して引用させていただきます。「わたしはあなたたちに信仰にしがみつくよう教えましたが、その信仰があなたたちの心の底までしみこんでいてほしいと思います、また、すべての行いは神様への愛から出るのでなければならない、ということも教えました。こういう教えのことばをしっかり心にとどめ、私たちの罪のために十字架にかかり、私たちを救うために死んでくださったお方に、全幅（ぜんぷく）の信頼をおくように。これがおかあさんの祈りです」

あなたが自分の目で見たことを忘れず、一生の間、それらがあなたの心から離れることのないようにしなさい。あなたはそれらを、あなたの子どもや孫たちに知らせなさい。

「民をわたしのもとに集めよ。わたしは彼らにわたしのことばを聞かせよう。それによって彼らが地上に生きている日の間、わたしを恐れることを学び、また彼らがその子どもたちに教えることができるように。」（申命記　4・9、10）

次男は二年生になり、クラスも担任の先生も持ちあがりました。現状についての連絡に合わせて、私たちの信仰と立ち位置をはっきりとお知らせするために、先生に手紙をお渡ししました。先生との面談が、思いがけずお交わりとなりました。私たちは先生にご迷惑をお掛けしている旨のお詫びと感謝を申し上げたかったのですが、「今のクラスや先生にとって彼は大切な存在です」、と先生の方から言ってくださり、先生も私もお互いに涙があふれました。みことばも受け取ってくださり、今は先生が救われるようにお祈りしています。

恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。（ダニエル　10・12）

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、

力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ　8・38〜39）

まもなく主が来てくださる、これが希望です。空をみあげてお待ちしています。

狩俣　望

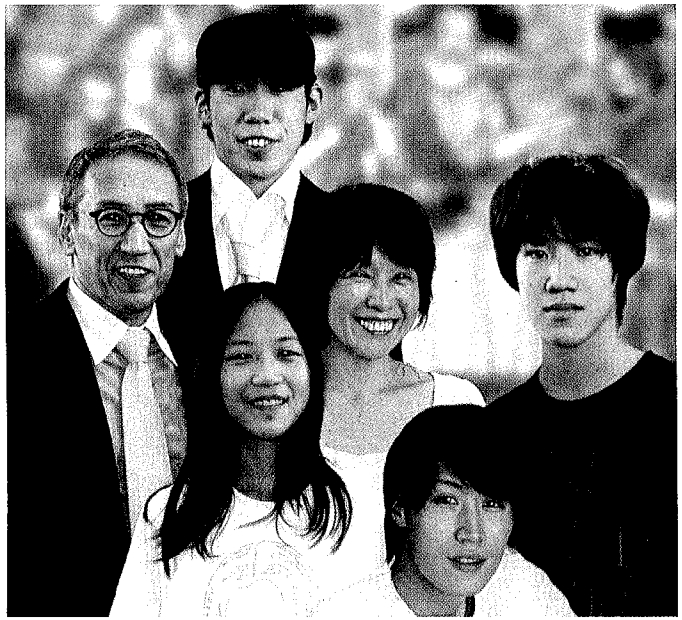
一九七一年七月十七日生まれ

西宮市立高木小学校、私立百合学院中学校、高等学校、聖和大学教育学部卒

夫・幸男、長男・優太、長女・こみち、次男・虹太（こうた）、三男・潤太（じゅんた）

放蕩息子という名のパリサイ人

木内　一郎



後列左から一郎さん、次男の勇さん、妻の恵さん、三男の繁さん、
前列左から末娘のマリヤさん、長男の翼さん

一九八九年、三十歳の時に、私は結婚を機に再び父の会社に入社しました。「再び」というのは、その五年前に「もう二度とスーツを着て仕事はすまい」と同社を退職し、自由人になると決めてインドに旅立っていたからです。当時はバブルの全盛期でした。インドを歩いている時でさえ日本の産業が好調であることは肌で感じられましたが、さらに加熱し、実力とは関係なく資産がふくれ上がる風潮に人々が踊らされている状況は不気味に思えました。そして、その波に乗り遅れてなるものかと社屋の新築や設備投資、増員と拡大方向に向って行く父の姿を目の当たりにしていました。

そんな折、バブルは突如崩壊しました。右肩上がりの経済成長の時代を生きてきた父にとって、それは未知の体験でした。呆然と立ち尽くしている間にもダメージは深刻度を増して行きました。資産を清算し、何処まで負債を圧縮できるのか。しかし、どう試算しても継続するには、最後の一手、人員を削減する他に手

段がない。当時、会社は、社員の大半が集会の兄弟姉妹でした。

その頃、家賃負担を軽減する目的で両親との同居生活が始まっていました。夜中になると毎日、不安に駆られた父は私を起こしにやって来たのです。父は、信仰を持つ以前、自ら「午前三時の恐怖」と呼んだ経営者特有の不安に襲われていました。一時期、鳴りをひそめていた真夜中の恐怖が再び父を襲うようになっていたのです。ああでもない、こうでもないと論じ合いますが、父の思いは、一つの考えに戻って行きました。「これからは、お前たちの世代だから、お前がリストラをやりなさい」。父は、いやな役回りを逃れたくて、そう言った訳ではありません。ただ、同じ世代同士で自分よりうまく、父の考えを遂行して欲しかったのでしょう。

最終的に父の要請を受けることになりました。連夜のやり取りに疲れ、根負けした感もありましたが、いやな役を引受けることが、どこか聖書的なことのように錯覚していたのです。しかし、心の何処かに「この犠牲は理解されるはず」という打算が隠れていました。その時は、自分に対してさえ、あたかも「きよい」犠牲のように上塗りしていたのです。自らを欺くことで、いかに父と子の、人と人の間に定められた境界線を見失ったことか。それが露（あら）わになり、その愚かしさに気づく時は、すぐにやって来ました。

悩んだあげく実情を全員に打ち明け、退職希望者に手を挙げてもらうことにしたのです。しかし、親しい信仰の友との間に亀裂が生じる事態は避けられず、引き裂かれるような痛みを覚えました。さらに、ぜひとも残ってほしいと思っていた人材も辞めることになり、このために父の苦情も受けるようになりました。「それなら、自分でやるべきだったではないか」、と私は憤慨し、父に対して抑えていたものがどうにも我慢できなくなり、七十歳を目前にした父を酷く殴ってしまったのです。直後、手をつき父に詫びたものの、取り返しのつかぬ惨めな思いのまま、ベックさんに電話をしました。

「僕は、とんでもないことをしてしまいました」

ベックさんは「人間とは、そういうものです。イエス様に謝れば神様との関係は、ＯＫだよ」と言ってくださいました。けれども、私の心は晴れませんでした。それは、自分を加害者と認めつつも、被害者として自己憐憫に逃げ込もうとする自分があったからです。

私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。（ローマ　14・12）

私たちの義はみな、不潔な着物のようです。（イザヤ　64・6）

見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。（ローマ　11・22）

それから年月は経ち、私は十字架の元に導かれました。

狭い門からはいりなさい。（マタイ　7・13）

「ただ、私が悪かった」、そうくずおれた時、心に静粛が訪れました。イエス様の眼差（まなざ）しが私を捉えていることを心で感じ取ることができました。

私は、長い年月、深い霊的な眠りに陥っていましたから、救いの喜びは過去のものになっていました。

もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の

中で一番哀れな者です。　（1コリント　15・19）

何とか、救いの大路に戻りたい。しかし、その糸口が分からない。それで、「リバイバルの鍵（かぎ）を与えてください」と祈り求めました。

一つ目の鍵は、ある方の祈りの言葉の中に見つけました。その方の祈りを真似て「自分を喜ばさないようにしてください」と祈り始めたのです。それは、「自分のいのちを愛する者はそれを失う」、あるいは「世を愛することは神に敵すること」というみことばに裏付けられていると思いました。まず不信仰を捨てる必要がありました。それから古い習慣であったり、立場であったり執着していたものを捨てるよう示されました。

しばらくして、二つ目の鍵を見つけました。その鍵は、「自分を守ることをやめなさい」というものでした。私に欠けていたのは「兄弟姉妹との交わり」だと自覚していました。一度、交わりから遠のきますと、それが、ますます億劫（おっくう）になっていました。自分を人の前にさらしたくないという‥。この警戒心を解除して「主の守り」に委ねようと思いました。

ちょうどこの頃、予期せぬ出来事がありました。長年集っていた相模原集会を離れて、町田集会が立てられることになったのです。二〇一一年の暮れのことです。新しく立てられた町田集会は交わりも新しくされました。そこには、長年、優しく見守ってくださっていた方がいました。消極的な私の背中を押してくださる方もいました。その交わりの中で、癒され、励まされ、力づけられたのです。

三つ目の鍵は、夫婦の問題の中で見つけました。私は、二十五年前にベックさんが紹介してくださった姉妹と結婚しました。独身時代の我々をそれぞれに知るある兄弟は、当時、「無理だよ、この結婚は。この二人にはつながるものがまったくないじゃないか」と言いました。知り会って四ヶ月で結婚に至りましたが、イエス

様を信じていること以外の共通項は見つかりませんでした。私には可愛がっていた犬がいて、結婚後もできれば連れて行きたいと思い、彼女に「犬は好き?」と尋ねました。彼女は、好きだと言うので新居へ連れて行きました。すると、彼女が酷（ひど）く怯えているので、再び尋ねると「犬が恐い」と言うのです。

またある日、「焼肉は好き?」と聞くと、「うん、好き」と答えるので焼肉屋へ行きました。ところが、野菜しか食べないのを見て肉が苦手であることが分かりました。私は、「あのね、僕は自分だけ美味しい思いをすれば、それで幸せだなんて思わないよ。一緒に美味しいものを食べたいと思うから聞くわけで、正直に言ってくれたらいいのに」と言いました。「ノー」と言えない彼女への配慮もなく、私の言葉は痛かったと思います。

結婚を決心した時は、いつも、二人の間に「みことばを置こうね」と約束しました。どんな共通項よりも、永遠の神を信じるつながりに勝るものはないと、三つ撚（よ）りの糸なら切れることはないと信じられたからです。四人の子どもが与えられました。外で何があっても、家に帰れば優しい妻と、可愛い子どもたちがいました。悩みはたくさんありましたが、「幸せ」と言っても良いだろうと思っていました。

しかし、子どもが大きくなるに連れ、一つの不安が過（よ）ぎりました。今の、悪い誘惑に満ちた時代に子どもたちはどうしたら守られるのだろうか。どうしたら、「何でもあり」の汚れた世から子どもたちは守られるのか。「子どもたちには、まっすぐに歩いてほしい」。それは切なる思いでした。

長男が中学に上がるころから、特に子どもたちが興味を示す方向に神経を配りました。できる限り子どもたちの「つまずき」となるものは遠ざけようと努力したのです。しかし、四六時中、彼らと一緒にいられるはずもなく、効果がないどころか、眉間（みけん）に

シワを寄せる私に隠れて好ましからざることをするようになりました。私は、子どもたちにも「ノー」と言えない妻に、しばしば抗議をするようになりました。「聖書は、『子どもを懲らしめよ』とも、『夫婦は、一致すべき』とも言っているじゃないか」と。こういう話になると、彼女は、決まって最後に言いました。「あなたの言うことは、いつも正しい」

私は、いつも吉野弘さんの祝婚歌という詩の一節を思い出していました。

正しいことを言うときは
少しひかえめにするほうがいい
正しいことを言うときは
相手を傷つけやすいものだと気付いているほうがいい
立派でありたいとか正しくありたいとかいう
無理な緊張には色目を使わず
ゆったりゆたかに光を浴びているほうがいい

私は「こうあるべき」という思いが強く、それが律法化していることに気づかずにいました。

あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。（マタイ　7・2）

「自分を量る秤と他人を量る秤は、本来同じものである！」ということでしょう。しかし、「みことばに従う」ことと「律法主義」の違いを定義できたとしても、実際面で、どうもハッキリしなかったのです。ある日、息子の一人が、ある事件を引き起こしました。私は、息子の不正に対し制裁を与えました。しかし、妻は、私が知らないところで息子と友好条約を結んでいました。そのことを巡って、妻と口論になりました。実のところ、それまで、口論らしい口論というのはなく、彼女はきっと、問題を自分の中に封じ込めるということで回避してきたと思います。しかし、この時の、彼女はすでに何かを決心したかのようでした。そして、「私とあなたは考え方が違い過ぎる。これ以上は、無理ですから出て行きます」と言いました。私も言わずには、いられませんでした。「考え方が違うのは、初めから分かっていたじゃないか。だから、中心に聖書を置こうって約束したじゃないか」

私は眠れず、夜中に祈っていると、急に思い立って、リビングの中央に十五年間掛かっていたスペインの風景画を外しに行きました。妻も私も大変気に入っていた油絵です。それを外して、次のみことばの額を掲げました。

主を恐れることは知識の初めである。（箴言　1・7）

家の中の一番良い場所に好きな絵を飾っておいたのはおかしい。みことばを中心に据えるべきだと思ったからです。早朝、妻は起きて来て、かなり取り乱した様子で、絵を外し、みことばに変えたことに抗議しました。私は驚き、「みことば」を否定してしまうのかと、彼女を指差して非難していました。彼女は、追い詰められた小動物のように、それでも初めて見る強さでこう言いました。「私は、あなたが大嫌い」。私は、家族が宝だと思っていました。いつも、一番失いたくないものだと。だから、父親たるものは子どもたちの壁になるべきだと考えていました。けれども、できてしまったものは、断絶の壁でした…。どうして、こうなってしまったのだろう。どうして、彼女にあそこまで言わせてしまったのか。私は祈ること以外、何もできず、祈りのなかで、「愛する我子の前に危険な刃物を置く親が一体いるでしょうか？私は、それを取り除くべきだと思ったのです」と主に申しあげました。

その時、ある疑問がわいて来ました。「神様は、なぜ、

エデンの園に命の木だけではなく善悪の知識の木も置かれたのだろうか?」。私は、毎日、その理由を探していました。そして、その答えは、やって来ました。「そうか、ノーと言えなければ、心からイエスと応えることもないからだ」と。妻はノーと言えず、無理に従おうとしてきた、と気づきました。おそらく、人との関係を重んじる故に、心はいつも置いてきぼりにされていたのでしょう。

しかし、今、彼女は、はっきりノーと言い、私を大嫌いと言うことができたのです。こうなったのは、義務としてではなく自由の中で私たちが真に愛し合うようになるためだと信じることができました。暗闇に光を見つけた気がしました。キリストの自由の中で「愛します」と言う「愛」だけが神様の目に価値があると分かりました。それ以来、私は、愛する妻のことも、可愛い子どもたちのことも、目に見える様子に踊らされずに委ねることを覚えました。

近頃は、家の中の風向きが変わって、北風は去り、彼女はよく笑うようになり、「私は、なんだか自由になった」と言っています。不思議なことに子どもたちにも明るく前向きな様子が見られるようになりました。

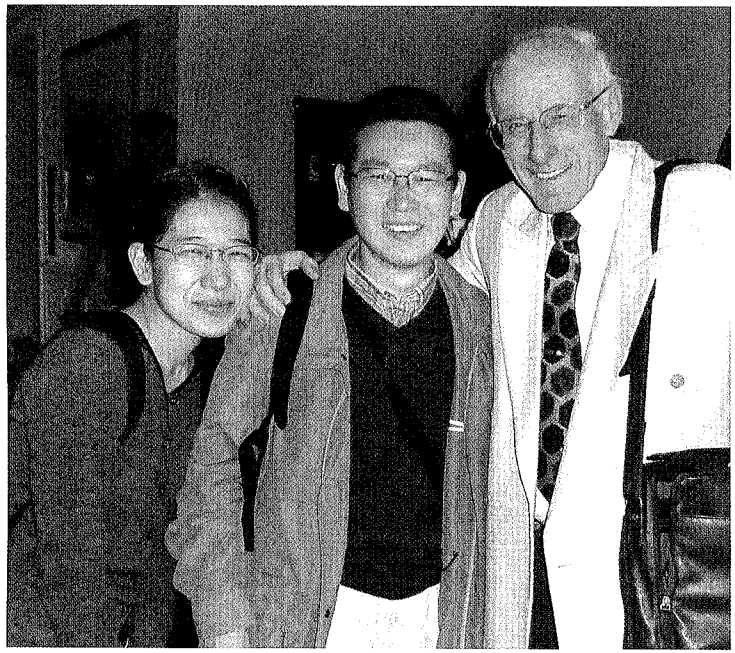
だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。（ヨハネ　12・47）

この方を愛さずには、いられないでしょう。

木内一郎
一九五八年　東京生まれ
都立代々木高校卒
キウチ株式会社勤務

主のあわれみと恵み

藤田　匡



中央が匡さん、妻の信子さん、ベックさんと

私は茨城県日立市で、両親と妹の四人家族の中で育ちました。幼稚園が教会付属で、卒園してからも高校まで、その教会の日曜学校に通っておりました。大学一年の頃、勧められるままに洗礼も受けました。しかし、その当時、イエス様を信じていたわけではなく、主は本当におられるのだろうか、とさえ思っておりました。

集会に初めて来たのは一九九一年、大学二年の時でした。母が御代田のゲストハウスで行われたキャンプに集うということで、その交通の付き添いで参りました。その頃、母が集会に導かれ、妹も母と一緒に集会に集うようになりました。また、それまで信仰には関心を持っていない様子であった父も一九九二年に洗礼を受け、集会に集うようになりました。私は大学入学と同時に実家から離れて学生生活を送っており、その頃は近所の教会に行っておりました。しかし、家族が集会に集うようになったため、私も同じところにと思い、

当時の神戸集会に集わせていただくことにしました。

このようにして、私は主に出会ってはいない状態で集会に参りました。集会での印象は「ここに集っている方々は本当にイエス様がおられると思っているらしい」ということでした。これは教会では感じなかったことで、少しショックを受けました。しばらく集っておりますうちに、周りとのギャップがますます明らかになっていきました。また、証し集などで主の力強いお働きについて読ませていただき、自分は主に出会っていない、と強く感じるようになりました。家族に「自分にはさっぱり分からない」と申しますと、実家からベック兄のメッセージテープが続々と送られてきました。テープを聞き、「主により頼むことが大事」と聞くと「主により頼む者としてください」と祈り、「自分の心の貧しさを知ることが大事」と聞くと「心の貧しさを教えてください」と祈りました。初めて主がおられるものとして祈るようになりました。そのようにしておりますと、イエス様が自分のわがままのために十字架についてくださったこと、救われるためには「ごめんなさい」「ありがとう」「よろしく」と言ってそれを受け取るだけでよいこと、を主が示してくださいました。このようにして私はそれまでの罪を悔い改めました。これが、主に出会わせていただいた時でした。

その後、大学院に進学いたしました。ここで主がくださいました恵みは、私にとって大変大きいものでしたので、このことを少し詳しく書かせていただきます。

大学院の入試は、私の実力ではとうてい無理と思われましたが、主に入れていただきました。当時は主を信じるようになっておりましたので、主に従っていきたいと思い、「あなたに従う者としてください」と祈るようになりました。このようにして大学院の生活が始まりました。しかし、すぐに物事がうまくいかなくなりました。

まず、私は同期の方々にまったくついていけませんでした。彼らには寝ていてもできることが私には徹夜してもできない、という状況が続きました。私は物理を専攻していましたが、それは主が与えてくださったものとして受け止めており、物理を通して自分は主に仕えるのだと思っておりました。しかし、私は、現実にまったく希望を持てなくなりました。私はすぐに人をうらやむようになり、落ち込むようになりました。主は私に、まず自分に与えられたもので満足するように、そして、その後で従ってくるように、求めておられるようでした。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

（2コリント　12・9）

研究のテーマを選ぶ時期となりました。もし興味深い研究ができれば、それなりに楽しく過ごせるのではないかと考えました。テーマを選ぶにあたり、先生の人数が限られているので互いに重ならないように、との指示が出ました。同期の方々がどのような方向を希望しているかはおおむね分かりましたので、私は自分のやりたいものとは違うテーマをあえて選びました。しかし、私は自分のテーマに興味が持てませんでした。基本的な枠組みの研究はすでに終わっていて、私のしていることは枝葉にすぎないように思えました。私はすぐに不満を持ち、ねたみに満たされるようになりました。私は、自分は興味ある研究から身を引いて、ほかの人にゆずったのだと思っておりました。しかし、私がその結果体験したのは完全な敗北でした。

あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。同

様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。

（マタイ　7・16〜18）

研究では自分の成果を同分野の方々の前で発表する機会がたびたびありました。良い発表をして好印象を与えることは、将来、職を得るためにも重要です。私は、自分の研究になかなか自信が持てない状態ではありましたが、発表に臨みました。しかし、研究グループの一員として成果をアピールする立場にありましたものの、質問に適切な受け答えができなかったこともあり、発表のたびに評価が落ちていくのを感じました。私が評価にしがみつけばつくほど状況は厳しくなりました。また、時間をかけて準備したことがグループの都合で無駄になることもしばしばでした。私は不満に満たされました。自分を正当化することしか考えられず、それを抑えることもできず、表面上はつくろっても態度に現れました。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

（ローマ　7・18）

私はどこまでも自分を愛する者であり、自分の心は自分を満足させる方向に向かい、それに対して自分はどうすることもできない、と認めざるをえませんでした。これは私にとってつらいことでした。悩み、祈らされました。しかし、そのようにしているうち、これらのことは、私が以前に「主に従う者としてください」と祈った祈りへの主の誠実なお答えだと思えてきました。

肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。

（ローマ　8・5〜7）

このみことばの通りでした。私は、「主に従う者としてください」と祈りながら実は主に従おうなどとは思ってもいないことを、主は示してくださいました。ただ主の前に恐れざるをえませんでした。主により頼まなければやっていけない者であるということを認めざるをえませんでした。

自分の内に良いものがまったくなく、それを期待することもできないことを見せられた時、それをすべてお持ちであるイエス様に絶えずより頼み続けることが自分にとって必要不可欠であると知らされました。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

（ヨハネ　15・5）

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

（ヨハネ　14・6）

その頃は、みことばやメッセージに大変支えられました。主が十字架で勝利されたこと、完全であられる主ご自身があわれんでくださり愛してくださること、主が私の内に働いてくださること、こうしたことはどんなに大きな恵みであるかを思わされました。主の十

ちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

研究に臨む時、また、先生や同期の方々の前に出る時など、日々の生活においてイエス様との関係が重要でした。自分は貧しい者であると知らせられ、しかし主により頼むことができるとわかると、大変楽になりました。問題が問題ではなくなってきておりました。

卒業が近づき、大学に残る方向で職を捜しましたが与えられませんでした。その後も引き続き忙しく研究をしてはおりましたが、職の見込みは難しそうな状況が続き、祈らされました。そのような中で、公務員試験を受けてみることにしました。実力的にはとうてい無理とも思われましたが、主のみこころならばそこに置いてくださり、みこころでなければ他のところに導いてくださる、という思いで平安の内に守られました。以前大学院に入る時は、物理をすることで主に仕える、と自分で決めて進み、その結果多くの失敗が与えられましたので、この時は、主にお任せするしかないと思いました。主のあわれみにより、二〇〇〇年に気象庁に就職させていただきました。結局それまで学んできたこととはかなり違うことを仕事とするようになりました。しかし、失ったものより得たものの方がずっと大きく、大学院でいただいた体験は大変貴重なものでした。

二〇〇三年に信子姉妹との結婚が与えられました。いつも助けられており、主に大変感謝いたしております。また、二〇〇四年から、仕事で米国オクラホマ州に二年間参りました。この二年間は、集会の兄弟姉妹がたの祈りの支えと力をそれまでになく強く体験させていただきました。豊かに働いてくださった主に感謝し、また、皆様に心より感謝申し上げます。

仕事におきましても主はいろいろなことを通して私に語ってくださいました。仕事に真剣にあたっても理解を得ることが難しい時期が続いたことがありました。このような状況の中でどのような態度を取ればよいか、どのように理解を得るかについて悩み、なかなか答えが出ないでおりました。実家でそのことについて話しておりました時、父が非常にさわやかに「死ねばいいんだよ」と言いました。はっとさせられ、確かにその通りだと思いました。

主がそのような立場に私を置かれたのに、私は自分の立場を自分で決めようとしておりました。私は、私の正当性、私の主張、私の損なわれたくない思いを満たそうとしておりました。しかし、そこにとどまっている限り、出口のない闇しかありませんでした。これらは私が関わり、支配するべきことではありませんでした。

ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責

字架が日々必要と思わされるようになりました。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

（2コリント　4・7）

いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。

（2コリント　4・10〜11）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のう

任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。（ローマ　8・12）

ここでも、主の十字架、主ご自身が必要でした。私は、またしても自分自身を中心に置こうといたしておりました。

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。（ガラテヤ　6・14）

私自身からは良いものは出てこないことをまた知らされました。しかし、それを認めると、非常に楽になりました。十字架のみもとにのみ平安がありました。主ご自身が完全に勝利を収めてくださり、生きて働いてくださいますことは大変感謝です。

私は自分を中心として歩むことしかできない者であり、それによって多くの方々を傷つける者です。しかし、主はあわれんでくださり、十字架の贖いに導いてくださり、関わってくださり、生きて働いてくださっていますことは、大変感謝です。すべてを完全になしてくださる主ご自身に期待して、主により頼みつつ歩んでいきたいと思っております。

それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。（イザヤ　30・18）

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。（哀歌　3・22〜24）

私たちのたましいは主を待ち望む。主は、われらの助け、われらの盾。まことに私たちの心は主を喜ぶ。私たちは、聖なる御名に信頼している。（詩篇　33・20〜21）

藤田　匡（ふじた　ただし）
一九七一年生まれ。茨城県出身。
成沢小、多賀中、水戸一高、京都大学理学部、京都大学大学院理学研究科博士課程、同研修員。
気象庁勤務。
家族は妻信子（のぶこ）。

この方にいのちがあった

藤田　信子



中央に信子さんとご主人の匡さん、お二人のご両親といっしょに

私は一九七二年に東京の麻布に生まれました。両親は電気店を営み、週末も忙しく働いておりました。母が小さな姉と私を近くの日曜学校に連れていってくれたことがイエス様との初めての出会いです。それからは姉と商店街のお友だちと、毎週通いました。イエス様が神様であると単純に信じておりましたが、聖書は遠い昔のお話のように思っておりました。

その後、中高一貫のミッションスクールに入学しました。希望の中学に入ったのですが、私はついていけず、すぐに落ちこぼれになりました。そのうち友人からいじめられるようになりましたが、自分は頭が悪いのだから仕方がないと思うことで現実を受け入れておりました。先生方は祈ってくださっていたと思います。担任の先生の取り計らいによりいじめはなくなりましたが、次第に他人を意識するようになり、偏差値によって自分の存在価値が揺れ動くようになりました。イエス様と出会う前、私の存在価値は、他人の評価によって上がったり下がったりする大変不安定なものでした。転機が訪れたのは、一八歳の春でした。大学受験に失敗し、むなしく悶々としていた時、一方的にイエス様は救いの手を差しのべてくださいました。

六年間一度も学校を休まなかったほど健康だった私が、その春、突然過呼吸になりました。数日後、突然腹部に激痛が走り、緊急入院。一時は助からないかもしれないというほど病状は悪化しました。当時の私は、「死」は人生の最後に来るものと思っていましたので、死について真剣に考えたことはありませんでした。でも本当は一番真剣に考えなければならないことだったのです。しかし、この世界にすべての希望と目的をおいていた私は、その時、死の直前にも価値を持ち続けるものを何も見つけ出せませんでした。自分が大切にしていたすべては死と同時に消えてしまうものばかりでした。たった一人で行かなければならない恐怖もありました。すべてのものが色を失った時、病室に「光」が差し込みました。その時、誰に何を言われたのでもなくイエス様のことを思い出しました。「この方を無視して生きてきてしまった。ごめんなさい。でももう間に合わない」と思いながら意識が遠のきました。

翌日は手術日でした。原因は良く分からないけれど手術をしていただけることになり、千cc輸血し、四〇針縫って手術が終わりました。お医者様からは、血液がもう少し失われていたらショック死するところでしたと言われました。

入院中、集会の方がお見舞いに来てくださり「本当に大切なものは一つだけよ」と言われました。私も本当に大切なものについて思わされていたところでしたので、「本当だ」と思いました。窓から二つの大きな虹が見えました。それまで動けなかったのですが、エレベーターまで背筋を伸ばして見送ることができました。その数日後、それまでノイローゼで大変苦しんでいた田中順治叔父が、まったく別人のようにニコニコ笑

しのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

（ヨハネ　5・24）

イエス様と出会って数年後、小学校のクラス会があり、久しぶりに担任の先生と会いました。その時、「あなたの家で聖書の話が聞けるなら行ってみたい」と言われ、先生のためにベック兄に来ていただくお願いを致しました。それが今も続く麻布家庭集会となりました。先生はお忙しく、家庭集会に集われたのは数回でした。しかし何年も経った時、先生からの留守電が携帯に入りました。「誰にも言わないで会いに来てほしい」という内容で、伝えられた場所は都内のホスピス病棟でした。祈りながら病棟に行きますと、そこには痩せられた先生がおられました。聖書の話をして欲しいと言われ、ベック兄に頼んで病院に来ていただきました。先生の顔が平安に変わりました。先生は、「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。」（イザヤ　41・10）というみことばが特に気に入られ、それから病院に行くたびに「恐れるな、恐れるなだね」と言われました。それからは薬で眠られている時間が多くなり、お見舞いに行っても休まれている様でした。「先生、今日は休まれているのですね。耳元でお祈りだけして帰ります」と伝えてお祈りしますと、決まって先生は「アーメン」とおっしゃられました。それからあっという間に天の故郷に帰られました。

話は前後しますが、一九九六年保育園に就職が決まりました。イエス様が備えてくださったと確信があり、天職だと思いましたが、子どもたちに、行事に、そして自分自身に振り回される日々でした。私は自分の死を見つめた時に「救い」を必要としましたが、日々を歩むためにも「救い」が必要でした。自分の中からは、つぶやきや自分を守る言葉しか出てきません。許

顔でお見舞いに来てくださいました。叔父は主イエス様と出会って、明るい人にすっかり変わっておりました。叔父を見て「まことに神はおられる」と思いました。

退院後、集会に集うようになり、一九九一年に両親と洗礼を受けました。主イエス様は一方的にあわれんでくださり、まことのいのち、「永遠のいのち」を与えてくださいました。病気が与えられたことによって、私は救い主と会うことができました。「死は終わりではない、私の行く先は滅びではない、主イエス様と永遠まで共に生きる」、この確信が与えられ、主のお恵みに感謝しております。

この方（主イエス様）にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。（ヨハネ　1・4～5）

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わた

容範囲を超えると子どもたちを受け入れることができませんでした。十字架が自分のためであったことを知り、悔い改め、主の救いに感謝致しました。主が私の内に生きていてくださることが私には必要でした。子どもたち、職員、保護者と接する時、私ではなくイエス様が接してください、と祈るようになりました。七年間の勤務は、自分に失望させられる日々であり、同時に主により頼むことに希望があることを知る日々でもありました。

神よ。まことに、あなたは私たちを調べ、銀を精練するように、私たちを練られました。しかし、あなたは豊かな所へ私たちを連れ出されました。

確かに、神は聞き入れ、私の祈りの声を心に留められた。ほむべきかな。神。神は、私の祈りを退けず、御恵みを私から取り去られなかった。

（詩篇　66・10、12、19～20）

二〇〇三年、主のあわれみと恵みによって主人匡さんとの結婚が与えられました。喜びも、直面している困難や悩みも分かち合い、祈り合えることは本当に大きな恵みです。

二〇〇四年から二年間、主人の仕事で米国オクラホマ州に行きました。その時ほど、祈りの力を体験した時はありません。私たちにはどうしたら良いのか分からないことがたくさんありましたが、イエス様にお祈りすると「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。」（詩篇　46・1）との通り、「そこに助け」があり、道が開かれました。主を呼び求めておられる方がすでに備えられており、絶妙なタイミングでその方と会わせてくださいました。

帰国の一か月前にオクラホマで喜びの集いが持たれることになりました。会場となるホテルへ何度も行き、詳細を確認し、観光地の見学などもしました。さまざまな準備を進めながら日が近づくに連れ、日本から兄弟姉妹がいらしてくださるのに、現地でお誘いできる人がいなかったらどうしようと不安が高まるばかりでした。日本の兄弟姉妹が祈ってくださり、オクラホマでも主にある姉妹と祈りつつ、ついにその日がやってきました。

その日は私たちが二年間滞在した中でも最悪な天候でした。日本から兄弟姉妹がホテルに着くや否や、氷の雪が激しく降り、町中あっという間にスケートリンクのようになりました。「なんでこれなんですか」、と窓を眺める私の目から涙がこぼれました。主人は「これもすべて祈りの答えだよ。最善だけが成るように祈ったじゃないか」と言うのです。私はこの雪氷がうらめしく、眺める度にまた涙がこぼれるのでした。こうしてオクラホマ喜びの集いが始まりました。

それから不思議なことがたくさん起こりました。集会室はホテルの都合で急遽変更となり、ずっと良い部屋が与えられました。会場で飲む珈琲が高かったのであまり量を頼んでいませんでした。ところが皆がいくら飲んでも珈琲が出てくるのです。食事は質素な料理を頼んでいたのですが、なぜかごちそうが振る舞われ、使ってはいけないと言われていた個室の食事室に通されました。そんなはずはないとその度にホテルに確認するのですが、笑顔でどうぞと勧められるのです。匡さんと私だけがその不思議を知っておりました。私は後で請求がきたらどうしようと少し青くなりましたが、そのような心配は無用でした。（今思うと雪で他の方のキャンセルがあったのかもしれません。詳細は今も不明です。）

現地で知り合った友人が雪の中を会場まで訪ねてくれました。その時、主人が司会を、私が奏楽をしていましたので、私たちはその場から動けませんでした。しかし兄弟姉妹がベック兄と初めて出会われたお母さんのために、必要なすべてのことを整えてくださっていました。まるで一つの大きなからだのように、それぞれが手となり、足となってくださっていました。初めて来られた友人たちは、私たちが愛し合い一つとなっている姿を見て、その暖かい雰囲気をとても喜ばれ、心を開いてくださいました。

神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。
（エペソ　1・19）

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。・・・主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。
（詩篇　133・1～3）

このように主のみわざを体験したにも関わらず、帰

国してから私は自分がどのように歩んで良いのか分からなくなってしまいました。

当時主人の帰りは大変遅く、夜は特に耐えがたく、どこにも居場所がないと孤独を感じるようになっていました。この時、私の中からは自分をあわれむ思いしか出てきませんでした。自分がかわいそう、と思うのはサタンの働きでした。しかし当時の私はこの穴にどんどん沈んでしまいました。それに気づいた時、いのちがけでイエス様のもとに逃げないといけないと思いました。しかし、自力ではどうしても抜けられませんでした。完全な敗北の日々でした。本当に苦しかった時、義理の母から「あなた死ぬのよ」と言われました。それは自我の死のことでした。イエス様の十字架の死と共に私はすでに死んでいる、ただイエス様に従いさえすればいのちにあって新しい歩みをすることができる、と気づかせていただきました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。

（ローマ　6・6～7）

イエス様の十字架に感謝致します。私は人や物事によって自分を満たそうとしがみついておりましたが、本当に私を満たすことのおできになるお方は「イエス様」のみでした。私の自我は、主イエス様に逆らい、自分の利益を追求し、正当化し、自分を第一とする歩みをさせてきた、と認めざるをえませんでした。それが私の本質であり今も変わりません。しかし、それを認めた時にとても楽になりました。イエス様は、こんな私を承知の上で、それでも愛し、手を差し伸べ、すぐそばで待っていてくださっていました。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

（ヘブル　13・5）

イエス様は、いのちを与え生かしてくださいました。渇きが癒され、孤独が消え去り、心に平安が戻って参りました。

肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。

（ローマ　8・6）

イエス様が支配してくださる毎日は幸せです。イエス様に日々支配していただくことが毎日の願いとなりました。主イエス様は罪を申し上げるとすぐに赦してくださいます。人にはできないことが、主はおできになります。聖書は約束の言葉で満ちていました。心から主を礼拝します。近い将来、この主とお目にかかれる、と考えただけで喜びがあふれてきます。兄弟姉妹と主の御名をほめたたえながら、天の御国を目指して主イエス様におまかせしていきたいと願っています。

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

（イザヤ　43・25）

あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。

（ヨハネ　3・30）

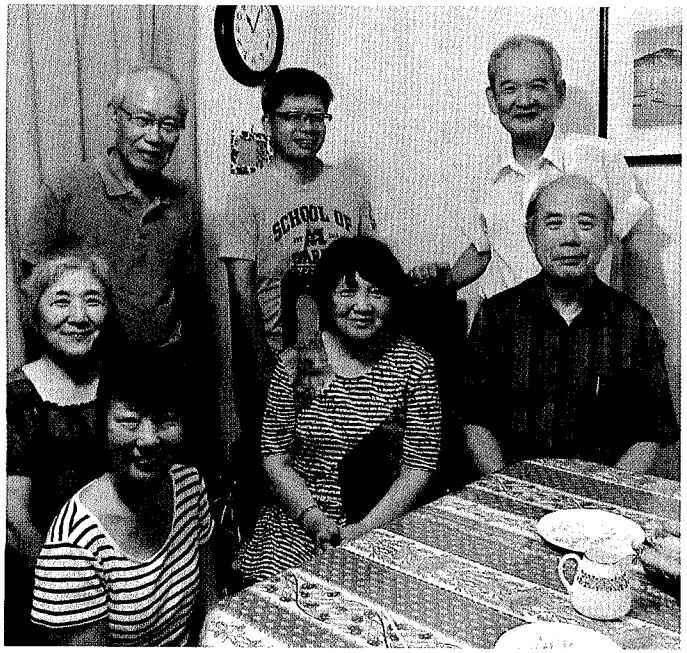
私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。
主のあわれみは尽きないからだ。（哀歌　3・22）

私たちのたましいは主を待ち望む。主は、われらの助け、われらの盾。まことに私たちの心は主を喜ぶ。私たちは、聖なる御名に信頼している。
（詩篇　33・20〜21）

藤田　信子（ふじた　のぶこ）
一九七二年生まれ。東京都出身。
南山小、玉川聖学院中等部、高等部、ルーテル学院大学社会福祉学科卒。
家族は夫　匡（ただし）。

主は私にただ正直になることを要求なさいます

池田　光夫



前列右が光夫さん、隣が妻の千代子さん、みなさんと

導かれて六年と六ケ月、主のみことばを与えられ、みことばを食べる（まだほんの少しですが）ことによって、「自我」がいかに罪深いものであるかを知らせられています。

一、主と出逢うまで

導かれる以前の私は、主なる神を知らず、認めず、この世の見える、聞こえる世界にどっぷりと浸かっていました。「最善を尽せば、道はおのずと開かれる」と信じ、仕事中心の会社人間として生きてきました。しかしそこから得たものは次の二つの実でした。

・私の二度にわたる病（狭心症）
・妻との不和による家庭の崩壊状態

私の人生哲学には、愚かで浅はかな「人間の考え」「判断」「行い」しかありませんでした。すべて「自分」中心であり、自我が強く、自己利益追求そのものでした。

イズレイル・ザングウィル（英・作家）は『利己主義は

唯一の無神論である。自己を中心に考えること、それは神の存在をはっきりと否定して神の位置に自分を押し上げるものである』と言っています。私は、聖なるものを「信じる」心がなく、人を「愛する」心がない者でした。エレミヤ書4章に書かれている「心の包皮が取り除かれていない者」でありました。自分の肉の性質にまったく気付いておらず、自分の本性を知りませんでした。

一九六三年ロッテへ入社しました。入社七年後から新製品開発部門へ配属されました。この部門は社長直轄部門であり、一般社員の時には想像できなかったプレッシャーがかかってきました。ストレスの溜り方も並みではなく、ポジションが上がるにつれプレッシャーはより強くなり、ストレスの塊のようになりました。こういう状態が二十八年間続きました。私の人生哲学「どんなことでも最善を尽せば、道はおのずと開かれる」は仕事上の課題を解決し、成果を生み出すのに役立ったのでしょう。新製品が次々と成功していきました。しかしそこには常に不安、孤独、恐怖心、不信感(市場・流通・人など)が存在していました。マリヤ・カラスは必要なものは「修練と勇気」、あとは「ゴミ」と言いましたが、凡人にはそんな決断は簡単にはできませんでした。そのために「気が強い」「度胸がある」「大胆さ」「自信満々」「孤独を恐れない」「勝負する」など、私の本来の性格とは真逆の振る舞いをせざるを得なかったのです。成功の喜びもありましたが、苦痛の伴う日々でした。

このような生活の中でストレスはどんどん蓄積していき、発散を求めて暴れだし、自分の力ではコントロール不能状態となっていきました。弱い人間(私の本質)は仕事が忙しい時ほど、ストレスが溜っている時ほど、遊びたくなります。それから逃げ出したいからです。マージャン、競馬、酒……、正に欲望の赴(おもむ)くままに…。そして家に帰れば「自分本位」「身勝手」「都合が悪くなればすぐに怒り出す」「態度や言葉遣いが気に入らなければ暴力をふるう」「子供のことは妻まかせ」「薄給の身でありながら金遣いは荒い」でした。しょうがないから妻は働き始めました。正に私は欲望に負け続ける生活を送っていました。

ローマ書13章13節の「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活」の日々でした。しかし。これら罪の塊のようなものをまったく罪と自覚せず、仕事も家庭もその時、その時、できる限りのことをしてきた、という奇妙な自負心すらもっていました。

二、罪、救われてなお犯す罪

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

(箴言　28・13)

「不機嫌ほど大きな罪はない」、このゲーテの言葉通り不機嫌が罪ならば、私は救われてからも罪に罪を重ねていたことになります。しかし、不機嫌を「罪」として認識することなどなく、まして大きな罪などとは思ってもいませんでした。不機嫌になる理由があるにせよ、ないにせよ、不機嫌は周りの人の心を暗くします。楽しい思いで夫を待っていても苦虫を噛みつぶしたような顔で帰られると、妻の楽しさは一挙に吹きとんでしまう、と解っていても、自分だけには許されると思ってしまう「自分中心」の者でした。それから解放されるには、人の慰めでもなく、自己弁護でもなく、ただ救い主・イエス様の前で正直に言い表し、告白し、赦しを請い求める祈りをする以外にありませんでした。不機嫌になるきっかけは他人から見れば他愛もないものばかりです。例えば妻の言葉が命令口調に聞こえる、妻の行動が何ごとも息子最優先の姿勢に見える、妻の自己主張が私に対する嫌味に聞こえる、自分の愛想なさは棚に上げて妻の無愛想な態度、家計のやりくりの問題等々が引き金となってしまうのです。それは私の自己中心、自己優先、高ぶり、傲慢な心がそのように思わせてしまうので

す。救われても残っている肉の心から自我や自尊心が飛び出してくるのを押えることができず、自分の存在が否定されたと強く思わされるのです。正にサタンのわなにみごとに嵌(は)まってしまうのです。ヴィルヘルム・ブッシュ牧師は、「鉱山の最下層には汚れた水が溜まっている。その汚水は、人の心の最深部に淀んでいるものと同じではないか。私たちの心の奥には、何層もの深い坑道が錯綜しているのではないか」と言っています。この汚水が噴き出し、怒りにつながり、腹立たしさ、憤りが、「言葉」となって飛び出し、感情を高ぶらせ、暴力にまで再三及びました。すぐに後悔するのですが、止めることができないのです。これが私の心の底から出てくる姿でした。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。

（エレミヤ　17・9）

怒る者は争いを引き起こし、憤る者は多くのそむきの罪を犯す。人の高ぶりはその人を低くし、心の低い人は誉れをつかむ。

（箴言　29・22～23）

三、主にあるお交わり

ベック兄は、そのような私に、「『千代子姉妹を愛しなさい』、『イエス様、ごめんなさい、赦してください』と祈りなさい。光夫に愛と平安が与えられます。悔い改めて、『イエス様、ありがとうございます』と言いなさい。そうすれば光夫を患難や試練から救ってくださいます」とおっしゃってくださいました。

あるご兄姉は、「姉妹の言葉は、主なるイエス様が姉妹の舌を使って兄弟におっしゃっていることだと思いなさい」と言ってくださいました。

ある姉妹からは、「どんな患難、試練、苦しみ、悲しみ、寂しさもイエス様から与えられた賜物だと受け取ることができますか?」と問われました。「これができない時は、『主に従順でない私をお赦しください。どうかこのことに従えるように私をお導きください』との悔い改めの祈りをすること。これができる時は、主に感謝し、主を賛美し、主の導きを喜ぶこと」と言われました。

また、ある兄弟は「救われた後の六年間余りの信仰生活の中で良きパートナーであり助け手である姉妹に対して、どのような事をしてきたかをすべて、正直に主の前に、また兄弟、姉妹の前に言い表わしなさい。そして主なるイエス様の前に悔い改め、告白し、赦しを請い、祈りなさい」と主のみこころを伝えてくださいました。

四、罪の言い表わし

もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

（1ヨハネ　1・8～9）

このようして、自分の罪をイエス様の前に出して祈ることと、限られた兄弟姉妹の前に言い表すことは徐々に生活の中に入ってきましたが、不特定多数の兄弟姉妹の前に明らかにする機会は、ある日突然、本当に突然に、主が与えてくださいました。二〇一三年の夏の御代田ロングキャンプの時でした。八月二日、ある兄姉の別荘で多くのご兄姉方々とのお交わりが与えられました。私は、二人の兄弟とともに少し遅れて参加しました。ちょうど各自がミニ証しをされており、私たちが参加した時は、ほとんど終わりに近づいておりました。そのためすぐに、何の心の準備もないまま私の番となってしまいました。主はぐずぐずし、ためらっていた私を有無も言わせずに、その場に立たせなさいました。こうして、救われた後の生活の中で生じていた千代子姉妹との行き違いやそこから発生する感情的なもの、ギクシャクした関係、また私の暴言、暴力等を主の前に悔い改める心をもって、兄弟姉妹の前に正直に

お話することができました。こうして、最大の罪からの解放へと導かれました。

だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。どうか、隠れている私の罪をお赦しください。あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。（詩篇　19・12〜13）

しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」（ヤコブ　4・6）

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。主はそのしもべのたましいを贖い出される。主に身を避ける者は、だれも罪に定められない。（詩篇　34・18、22）

私たちが生来からもつ感情のなかで自負心ほど抑制しがたいものはありません。私たちの感情の中では、自分では意図しなくてもそこに、自尊心やその変形した自負心、あるいは高慢さなどがまざってしまいます。それは意図的に除外しようとしてもなお無意識のうちに入ってきてしまいます。これは自分の力では断ち切ることは困難です。それは正に神の領域なのだということを認識した次第です、ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』の中で「神と悪魔が闘っている。そしてその戦場こそは人間の心なのだ」と言っています。この心の悪魔を洗い流すクレンジングが必要です。それには意識して「内面を洗う時間」を持つこと、すなわち、すべてを言葉にし、言い表わし、告白し、「主に赦しを請う」祈る時間を持つことだと正に実感しました。

「主が私の自我をそれこそ徹底的に砕いてくださり、私に平安をお与えください」と祈ることなくして、聖霊に満たされることはないことを体験しました。

ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。（ヤコブ　4・7）

五、正しい心で祈る

主の前に赦しを請うべきは、主の前に出るのにふさわしくない私であり、私の心は本当に自分中心で一日として人を責めない日はない情けない状態でした。ねたみ、恨み、憎しみ、許さない心、苦々しさ、利己心、誇り、自尊心、怒り、不満、憤りが心にあるならば、主は私の祈りに答えられない、祈る時には正直でなくてはならないと改めて思い到りました。

もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。（詩篇　66・18）

あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。（エゼキエル　36・26）

私のたましいが生き、あなたをほめたたえますように。そしてあなたのさばきが私の助けとなりますように。（詩篇　119・175）

六、最後に

千代子姉妹は、二〇一四年一月二十六日に古希を迎えました。ささやかな祝いを息子と共に行いました。その時に千代子姉妹に渡した「みことば」を最後に書かせていただきます。

これは私にとって真の愛の賛歌です。この「愛」の主のみことばがいつも私の心に満ち満ち、千代子姉妹を「愛し」、「尊敬し」、良き助け手として共に信仰の生活を送りたい、と願っています。

愛には偽りがあってはなりません。
（ローマ　12・9）

兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。
（ローマ　12・10）

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。
（エペソ　5・25）

同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。
（1ペテロ　3・7）

池田光夫（いけだ　みつを）
一九三九年　金沢市生まれ
一九六三年　明治大学経営学部卒
　　ロッテ商事（株）入社（営業部門）
一九七一年　（株）ロッテへ転属（製造部門）
二〇〇四年　退職
妻　千代子（ちよこ）、長女　ゆかり、長男　知之（ともゆき）、孫　四人

悲しみを喜びに変えてくださるイエス様

佐藤　啓子



右から啓子さん、お姉様の道子さんと秀子さん

私は子どもの頃からいつも不安感があり、何か満たされない気持ちがありました。何事もがんばらなくちゃあいけないとか、こういう態度をとると人にどう思われるか、と人の顔色をうかがうような日々で、心の休まることがありませんでした。死への恐怖も強くありました。

キリスト集会との出会いは、二十年ほど前のことになります。久しぶりに会った友人が、「この本もらったんだけど、私はあまり興味がないので、佐藤さん読む?」と言って、「光よあれ　四集」を手渡してくれました。長い間、その本は家の棚の上に置いたままになっていたのですが、ある日、娘がその本を見つけ、表紙の写真を見て「私の知っている人がのっている」と言うのです。それじゃあ、といって本を開いてみることにしました。ページが進むにつれ、ひきつけられ、一気に読み、感動しました。どなたの証を読んでも「聖書にこう書かれてあるから、こうなのです」という表現が目に止まって、びっ

くりしました。苦しみの中でも希望を持って生きておられることが、不思議でうらやましく思いました。私もあの喜びが欲しい、と心から思いました。

そのうち集会に集うようになり、近くの姉妹たちとの交わりも与えられるようになりました。少しずつ心は軽くなりうれしくなるのですが、生まれつきの不安感、傲慢、自我、自己中心が心の中にヘドロのようにこびりついていて、苦しみました。熱心に聖書を読み、祈り、メッセージを聞き、交わり、平安な気持ちになるのですが、頭を上げるとまた、自分の思い、自我が支配するというくり返しでした。まったく救われてはいませんでした。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。
（エレミヤ　17・9）

でも、こんなどうしようもない私を主は決して見放さず、あわれみ続けてくださっていたのです。

主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」
（ヘブル　13・5）

二〇一一年六月のことです。日曜日の朝、娘から「大変なことになった。すぐ来て。今、病院。星吾がだめかも知れない」という電話がありました。何を言っているのかわからないので、義理の息子に代わってもらいました。生後七ヶ月の孫が心肺停止の状態で、今、救急車で救急病院に着いたので来てください、ということでした。何かの間違いではないか。間違いであってほしいと祈りつつ向かいました。事態は深刻でした。「離乳食の用意をして、寝ている星吾の部屋に行ったら、もう動いてなかった」と言うのです。私は体中が氷のようになりました。先生には「もう元には戻らない。この状態が三日続くか、十日続くかわからない」と言われました。

この状態で一日一日がたっていきます。もうあの子には会えなくなる、という胸が張り裂けそうな悲しみ、そして娘夫婦の苦しんでいる姿を目の前で見る悲しみ、また、四歳の孫娘の「どうして、何で」と言いながら、じっと耐え、幼い弟を思うさまを見つめる悲しみ。それが続くのです。本当に深い泥沼に吸い込まれるような苦しみでした。私が元気を出してこの場をしのがなければ、と思うのですが、太いロープで体中をぐるぐる巻きにされ、心の中に刃物が刺し込まれ、そして、氷を入れられたような感じでした。まったく感覚はありませんでした。

どこにも持っていき場のない気持ち、身の置き所のない苦しみで、私はふとんの上に横たわりました。体を「く」の字にして、ただ、ただ、「イエス様…。イエス様…。イエス様。助けてください。イエス様…。イエス様…」と声にならない声で叫んでいました。どれくらい時間がたったのでしょう。十分くらいだったのか、一時間くらいだったのかわかりませんが、心の奥底から、「わたしが関わっているよ」というイエス様の声が聞こえました。「えっ？イエス様。あなたがこのことに関わっておられるのですか？そうか、私一人でがんばらなくていいのか。イエス様が責任を取ってくださるのか」。久しぶりに息ができた気がしました。「そうか！そうだったのか」としばらくその状態でいますと、次々とみことばが私の心の中にあふれてきました。

民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。
（詩篇　62・8）

エッ？　イエス様。こんな時にもですか？わかりました。そうします。

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・11）

今、失望のどん底ですけど、イエス様、失望させられることはないのですね？そうですか。わかりました。

イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」（ヨハネ　13・7）

わかる時がくるって本当ですか？あなたのおっしゃることですから、信じます。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

エッ？これが益になるって？星吾ちゃんが死んでいくことが益になるのですか？そうですか。わかりました。

そばにいてくださるイエス様と私。二人で話をしているという感じでした。体のロープははずされ、心の中の刃物や氷に代って温かいものがあふれてくる感じがしました。体が軽くなり、呼吸ができ、起き上がることができました。

それから娘夫婦と一緒にベックさんのところへ行き、すべてをお話ししました。ベックさんは、「天国に行くよ。一番いいところだよ」と言ってくださり、葬儀もやってくださると約束してくださり、心が軽くなりました。

その三日後、孫の星吾は天に召されました。娘夫婦も私たちも落ち着いてそのことを受け入れることができたのは本当に感謝でした。

火葬の翌日、娘夫婦からこんな提案がありました。「お父さんとお母さんが年をとったら、いつかこの近くに住んでもらえればいいね、と夫婦で話していたの。そうしたら、私たち二人に、『それは今だ。今近くに住むべきでしょう』という主の声があの火葬場で聞こえてきました。それで、今私たちの住んでいる家にお父さんとお母さんに越してきてもらって、私たちは向かいの売出し中のマンションを買ってそこに移ろうと思います。マンションは、あと二戸だけ空いていて、今日中に申し込めばまだ間に合うという話しでした。だから、うちに越してきていただけますか」という内容でした。突然の話で、考えてもみなかったことなので、びっくりしました。「お父さんと相談してみるわ」と言うと、義理の息子は、「さっきお父さんに電話しました。君たちの好きなようにしなさい」と言われたとのことです。まったく、主人も私も自分の考えはありませんでした。主が関わっておられるのがよくわかりました。そしてその日、契約は成立しました。

それから三日後の火曜日、吉祥寺キリスト集会でベック兄の司式で葬儀をしていただきました。多くの兄弟姉妹方にお世話になったこと、心から感謝しています。集会場は明るく清らかで、本当に天国のようでした。窓から輝く光を見ていると、手をのばせば、イエス様にだっこされて笑っている孫の星吾に届くようでした。

見よ。一つのはしごが地に向けて立てられている。その頂は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしている。（創世記　28・12）

ああ、そうか。星吾は日本国から天国に住民票を移しただけなんだ。そう思わされて、心から嬉しく感謝しました。それから、娘家族はマンションに引っ越しました。そこは、モデルルームだったので、家具、テレビ、カーテン、なべ、食器など、すべてがそろっていました。私たちも三か月後に、娘たちの住んでいた家に引っ越し、少しずつ、生活も落ち着きを取り戻してい

きました。

実は私たち家族は、十五年前に家を建てる計画がありました。設計図もでき上がり、準備がすべてOKになった時、ある事情で取りやめなければならなくなりました。本当に悲しいことでした。それが、今回引っ越すまでまったく気がつかなかったのですが、私たちが越していった娘夫婦の家は十五年前に設計した家とまったく同じ間取りだったのです。びっくりしました。

「イエス様。ここまでですか？ここまで良くしてくださるのですか？」。「十五年前の私の涙も祈りもすべてご存じだったのですね。そして今ここに来ることがご計画だったのですね」

したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

（ローマ　9・16）

星吾が天に召されて一年三ヶ月後に新しい生命が誕生しました。男の子でした。星吾は天に生きており、地上には新しい生命、祥吾が与えられました。主は与え、主は取られる。そしてまた与えられる。それに加え、下の娘にも六週間後に男の子が与えられました。主は、私と私の家族にヨブとまったく同じことをしてくださったのです。

ヨブがその友人たちのために祈ったとき、主はヨブを元どおりにし、さらに主はヨブの所有物をすべて二倍に増された。

（ヨブ　42・10）

「主は生きておられる。みことばは真理である」ということが、しっかりと私の心に刻み込まれました。ああ、そうだったのか。あの苦しい時、ふとんの中で私が叫んだ時、私に語ってくださったみことばはすべて真実だったのですね。うれし涙があふれて止まりませんでした。

主の祝福はそれだけでは終りませんでした。さらに豊かな祝福を与えてくださいました。私には九歳年上の姉が姫路に住んでいます。十年以上前から「光よあれ」や集会の小冊子、メッセージのテープなどを送り、会う度にイエス様の話をしていましたが、まったく受けつけてくれません。「そんな外国の神様が、日本のこんな所のことまで何でわかるのよ」、「祈っただけでいいなんて、考えられない。もっと何かしなくちゃあ。私はいいから、あなたたちだけでやっておけばいいのよ」ということでした。

その姉が、孫の葬儀に来てくれました。葬儀の後もしばらく我が家に滞在してくれ、一緒に日曜礼拝、火曜の学び、近くの姉妹たちとの交わりをしていくうちに、「みんな明るくておだやかな顔ね。こんな人たちと会うのははじめてだわ。不思議な所ね。しかも、全然知らない私をこんなに歓迎してくださるなんてすごいわ。考えられないわ」と言うようになりました。そして、姉妹たちから夏の御代田のキャンプに誘われた姉は、その場で「行きます」と約束していました。目をみはる奇跡でした。

そして、姉は二〇一三年の二月から芦屋集会に集うようになりました。「主イエス様。強情で親不孝な私をお赦しくださったイエス様、ありがとうございます」と祈るようになり、「星吾ちゃんのあの葬儀があったからイエス様を知ることができた」と今はすごく喜んでいます。

毎日の生活においては、私は、今もなおヘドロのようにこびりついている自我が頭をもたげます。自我との戦いです。でも、主に祈り、主の約束の方を選び、私も日本国から天国に住民票を移すまでイエス様だけに目をとめて、まっすぐに歩んでいきたいと、日々祈っています。

また、荒野では、あなたがたがこの所に来るまでの、全道中、人がその子を抱くように、あなたの神、主が、あなたを抱かれたのを見ているのだ。
（申命記　1・31）

しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。
（ヨハネ　16・20）

佐藤啓子
一九四七年　兵庫県生まれ
県立姫路東高校、賢明女子学院短期大学卒
夫・剛一　子・二女

主を見上げて

牧野　正士



左が正士さん

私は、一九六一年（昭和三十六年）に、父・牧野正俊、母・冨美子の長男として、大阪市で生まれました。生まれてまもなく、一家は京都市内にある祖母の家に引っ越しました。その後、小学校一年の時に京都府郊外の新興住宅地に引っ越し、東京の大学に入学するまでの約十八年間を京都で過ごしました。

私は、特にクリスチャン・ホームに育ったというわけではなく、思い起こせば、幼稚園の卒園式でもらった一冊の新約聖書が、聖書との最初の出会いでした。卒園式の時の園長先生のお話で、内容はほとんど覚えていないのですが、「苦しい時やつらい時には、イエス様にお祈りしてくださいね」と言われたことだけは、不思議と記憶に残っています。

最近になって卒園時のアルバムを開いた時に、詩篇23篇のみことばが書かれた紙が貼られていることに気づきました。漢字で書かれていたので、おそらく、大人になった時に読んでほしいという先生方の思いが

込められていたのだと思います。

小学生の時は、近所の人に誘われてクリスマス会に参加しました。クリスマス会では、教会の礼拝堂で賛美歌を歌い、またキャンドルを手に病院の前などで賛美歌を歌ったことが印象的でした。街は雪が降って寒かったのですが、心の中は不思議と温かいもので満たされていたことが、今でも忘れられない経験です。

小学校の時は、まったくといっていいほど勉強はしなかったのですが、六年生の時に、担任の先生から「このままでは普通科の高校に入れない」と言われたことにショックを受けて、中学生の時は、まるで人が変わったように受験勉強のために過ごす毎日でした。そのため、教会のキャンプに参加することもなくなってしまいましたが、キリスト教を背景としたドストエフスキーの小説には惹かれて読んでいたことを思い起こします。中でも、『カラマーゾフの兄弟』は、印象に残っています。

高校は、進学校と言われるところに入学できたのですが、クラスメートからいじめられたことがきっかけで、自分の殻に閉じこもるようになり、友達付き会いもなく、得意な科目を除いては勉強にも身が入らない孤独な寂しい高校生活でした。結果として、大学受験に失敗し、一年間浪人することになりました。その時に通った予備校の英語の先生が、熱心なクリスチャンで、授業中にしばしばされた聖書や信仰の話は印象的でした。

また、その時に思い起こされたのが、小学生の時に参加した心暖まるクリスマス会のことでした。そのため自ずと、大学に入ったら教会に行きたいとの思いが与えられました。

大学生になって、教会に行きたいという思いはありましたが、聖書や教会についての知識はなく、クリスチャンの友人もいなかったので、どこの教会に行ったらよいか分かりませんでした。大学近くの駅前で勧誘

していた統一協会の人の話を聞きにいったこともありましたが、そこにいた人たちの態度や、一方的な教え方に違和感を覚えたことと、帰省した時に両親に猛反対されたこともあって、それっきり行くのをやめました。

次に行ったのが、下宿先の近くにあった大きなカトリックの教会でした。しばらくそこに通って、個人指導を受けましたが、神父さんの話が、人間的な聖書の講釈のように思えて、求めていたものと違っていたため、次第に興味がなくなって行かなくなってしまいました。

次に、当時見ていたキリスト教番組に手紙を書いて、大学近くのプロテスタント教会を紹介していただきました。その教会の伝道集会で、牧師さんの招きに応じて、イエス様を受け入れる決心をしたのですが、聖書の知識を持たない自分にとって、親しい人もいない教会での交わりになかなか溶け込めず、結局、数ヶ月で離れてしまいました。今から思えば、当時の自分は教会に人間的な暖かさを求めていただけで、自分の罪や、イエス様の十字架の意味についての認識が不十分で、聖書のみことばを土台とした信仰となっていなかったのです。

教会を離れてからの三年間は、学生生活の気楽さもあって、心の満たしを娯楽や人間関係に求めましたが、それらもうまくいかず、やってきたのはどうしようもない虚しさでした。そして、再びイエス様のところに戻りたいとの思いが与えられるようになりました。しかし、以前、教会の門戸を叩いた時の失敗を繰り返さないためにも、まず「キリスト教とは何か」について、自分なりに知る必要があると思いました。そのためには、どうすれば良いかと考えた時に、行き着いたのは、聖書を読むことでした。それから、一年間ほどかけて、自分なりに聖書を読んでみました。興味のあるところから少しずつ読み拡げていく形でし

たが、読んで感じたことは、聖書は、決して人間の恣意によって書かれたものでないこと、聖書に書かれていることは、すべて、イエス・キリストという一人のお方に集約されていくこと、人間は、生まれながら、神様に対して罪人であり、神様と和解する必要があること、そのために必要なのは、努力や修行をすることではなく、ただ、自分の罪の身代わりとなって、十字架に架かってくださったイエス・キリストを救い主として受け入れることであるということでした。

再び教会に集いたいという思いが与えられましたが、その時にふと思い出したのが、大学のゼミの先生がクリスチャンだと言われていたことでした。その先生に相談したところ紹介していただいたのが、吉祥寺キリスト集会でした。

集会に来て驚いたのは、一般の教会と違い、会堂の屋根や礼拝堂の中に十字架が掲げられていないことでした。それまでキリスト教の教会といえば、屋根に十字架がついているものという固定観念がありましたので、私にとってはかなり衝撃的でした。それは私にとって、既成の形にとらわれない本物の信仰を学ばされるための最初の入り口であったのだと思っています。

最初のベック兄とのお交わりで、ベック兄に、「以前、教会でイエス様を救い主として受け入れたけれど、救われたということがピンと来ないんです」とお話したところ、ベック兄は、「私だってピンと来ないよ」と言われました。そして、「ピンと来たから救われたんじゃないよ。聖書に書いてあるからです。それを信じないことが罪です。救われていることを信じてこなかったことを悔い改めましょう」と言われて、ベック兄に導かれて悔い改めのお祈りをさせていただきました。

また集会に導いてくださったご兄姉からすすめられて読んだのが「実を結ぶ命」でした。私は、それまで、病気の癒しのためにイエス様に祈ることは、自然なことと考えていました。しかし「実を結ぶ命」を読んで思わされたのは、「病気が癒されないと知った時に、病気が癒やされることよりも、イエス様の御元に行けることを喜んだ」リンデ姉妹の信仰こそが本物の信仰であるということでした。といっても、その時はまだ頭で納得した程度で、感情と信仰はついていっていない状況でしたが、それから三十年近くの信仰生活を経てようやく少しずつ「実を結ぶ命」に書かれていることの意味が実感されるようになってきた思いがいたします。

集会に集いはじめて二ヶ月たった頃に、集会に導いてくださったご兄姉から受洗を勧められました。自分ではまだ早いのでは、という思いもありましたが、一九八五年のクリスマスに、吉祥寺集会で、ベック兄から洗礼を授けていただきました。

それから三十年近く経ちましたが、その中で、私にとって試練だったのが、親しくしていた兄弟姉妹の方が集会を離れていかれたことでした。離れていかれたのは、大抵が面倒見の良い兄姉の方々でした。つらい経験でしたが、そのことから学ばされたのは、人を見てはいけないということでした。イエス様は、私たちが、イエス様よりも人間関係に重きをおいてしまうことがないように、時としてそのようなことが起きるのを許されるということではないかと思わされています。

そのような歩みの中で、いただいた大きな恵みは、両親の救いであったと思います。

当時私は、東京で一人暮らしをしていましたので、京都の両親と、普段は会う機会がなかったのですが、両親の救いを祈りつつ、手紙を書いたり、実家に帰った折に関西の集会に誘うなどして兄弟姉妹の方にお交わりいただいているうちに、先ず、母が心を開いてくれるようになり、母と共に父も集会に参加してくれるようになりました。そして当時、田中公会堂

で行われていた神戸集会で、両親そろってベック兄とのお交わりが与えられ、悔い改めの祈りに導かれました。その後、兄弟姉妹の方々のお祈りの中、一九九一年のクリスマスに吉祥寺集会で受洗の恵みに与りました。両親は、その後も大阪や神戸の集会に集わせていただいていましたが、二〇〇九年三月に母が、その年の十二月に父が相次いで病を通して天に召されました。

葬儀は、実家の近くの葬儀場で行われましたが、関西の集会の兄弟姉妹の方々が奉仕してくださり、主の恵みの中で執り行われました。また、実家の近所の方々も参加してくださったので、ご近所の方に福音をお伝えする機会ともなりました。また、両親のことを通して、京都に住む妹が、イエス様に心を開くようになってくれたことは感謝でした。両親にとって、地上での最後の何年かは病との戦いでしたが、入院中、多くの兄弟姉妹の方が交わりに来てくださったことは、両親にとって励みであったことと思います。

今は苦しみからまったく解放された両親が、天国でイエス様と、また先に召された兄弟姉妹の方々と楽しいお交わりを与えられていることが確信できることは感謝です。私たちも、天国で両親と再会できることは本当に大きな恵みと感謝しています。

私は、二十九歳の時に、結婚についても真剣に考えなければならないことを思わされました。ただ、自分自身の考えはあてにならない、と思っていましたので、結婚相手のことはもとより、結婚すべきかも含めて、イエス様に決めていただきたいとの思いがありました。

「イエス様、もし結婚することが御心でしたら、三十歳の誕生日までに結婚に導かれる姉妹をお示しください。そうでなければ、結婚はあきらめます」と祈りました。今から思うと、かなり一方的なお祈りであったと思いますが、イエス様は、憐れみによって、家内との出会いに導いてくださいました。結婚についてイエス様に祈ったその年の年末に、私は、中国に聖書を届けるある伝道団体の旅行に参加しました。その旅行に家内も参加していたのですが、私が旅行に参加するきっかけとして与えられた聖書のみことばと、家内に与えられていたみことばが、同じピリピ書2章13節であったことがきっかけとなりました。

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。
（ピリピ　2・13）

当時、家内は秋田県に住んでいて、家内が通っていた教会も、キリスト集会と特につながりがあったわけではありません。結婚が御心かどうか悩んだこともありましたが、その後、文通を続ける中で、最終的には、ピリピ書2章13節のみことばによって押し出される形で結婚へと導かれました。

それから二十年以上が経ちました。今でも、家内がイエス様から与えられた姉妹であるという思いは変わっていませんが、家庭は、恵みと試練の両方を与えられる場であると感じさせられています。夫婦の間の問題は、自我が砕かれるために、イエス様があえてお与えになるものではないかと思います。夫婦の問題を通して、自分や相手を見るのではなく、私たちの救い主であるイエス様だけに目を向けること以外に解決は見いだせないことを思わされています。

子どもたちについても、自分の思い通りにはならないことを示されています。二〇一一年のことですが、子どものことで、家内と二人でベック兄にお交わりいただいたことがあります。その時に、ベック兄が言われた、「過去にああしたらよかったとか、過去のことをくよくよと考えない方がよい。このこともイエス様のせいにしましょう」という言葉で、大変心が軽くなりました。

会社は、入社以来、三十年近く経ちました。入社した頃は、バブルの最盛期で景気もよかったのですが、その後バブルが崩壊して、会社の業績も落ち込みました。人員削減などによって仕事もきつくなり、毎日が目の前の仕事に追われる、余裕のない状況が続いています。つらいことが多い会社生活ですが、これもまた、私自身が砕かれるために、イエス様から与えられた試練だと思っています。

そのような中で、日曜日には、仕事や日常生活を離れて礼拝に参加し、兄弟姉妹の方と心やすらぐお交わりが与えられていることは、本当に感謝です。

救われてからの三十年間を振り返って思わされることは、自分というものが、どうしようもなく惨めな者であること、また、人をあてにすることもまた虚しいということです。救われた時は、立派なクリスチャンにならなければ、という意気込みがあったのに、いつの間にか自分はイエス様を悲しませている者になってしまっていることに気付かされます。そして得られた結論は、イエス様お一人だけが正しいお方であり、自分自身は、何一つとしてそれに付け加えることができないということです。そればかりか、イエス様が、そのような私のために、十字架にかかってくださったことにより、もはや自分自身に目を向ける必要も、自分が立派になる必要もなく、イエス様お一人だけを見上げていればよいということでした。

自分が砕かれて、人間的に頼みとするものが一つ一つ取り去られていく中で、イエス様と聖書のみことばだけはいつも変わらず、信頼すべきものであることを日々覚えさせられております。

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・11）

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。（ハバクク　3・17～18）

牧野正士（せいし）
一九六一年　大阪市生まれ
早稲田大学　理工学部・理工学研究科卒
日本アイ・ビー・エム（株）　勤務

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

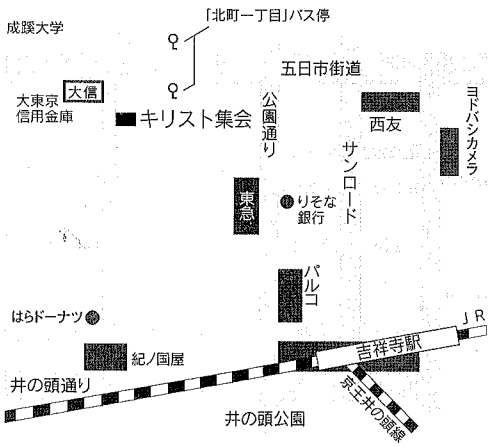
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

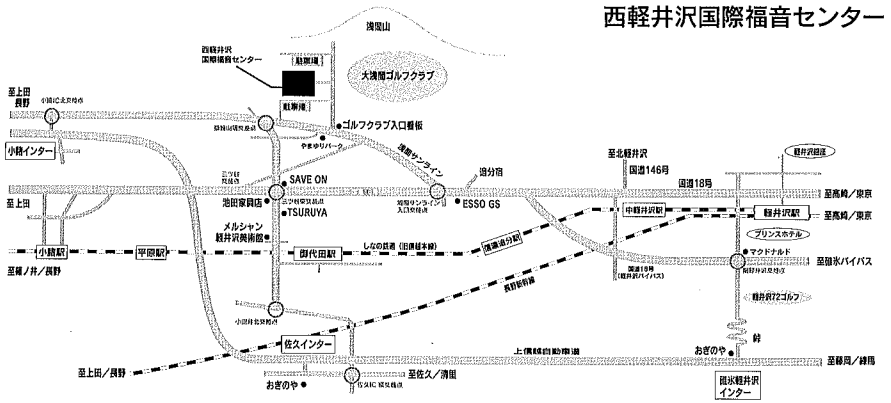
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15 〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33 〒389−0201

■ しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

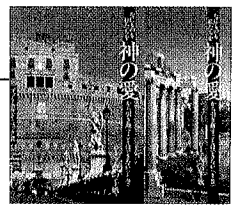


ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

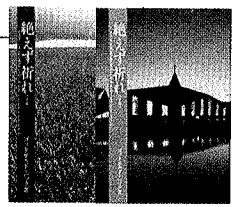
なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ (上・下巻)

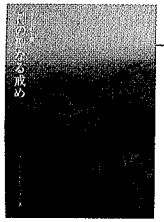


ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

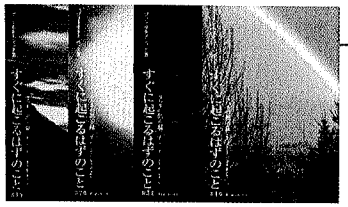
注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4−9−11　吉祥寺キリスト集会



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと−ヨハネの黙示録 (第1〜4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1〜3章、第2巻には4〜7章、第3巻には8〜15章、第4巻には16〜終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ −私たちは主のもの

証しシリーズ (第1〜9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を100円で配付しています。
お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第35号

定価100円（税込み）2015年1月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

